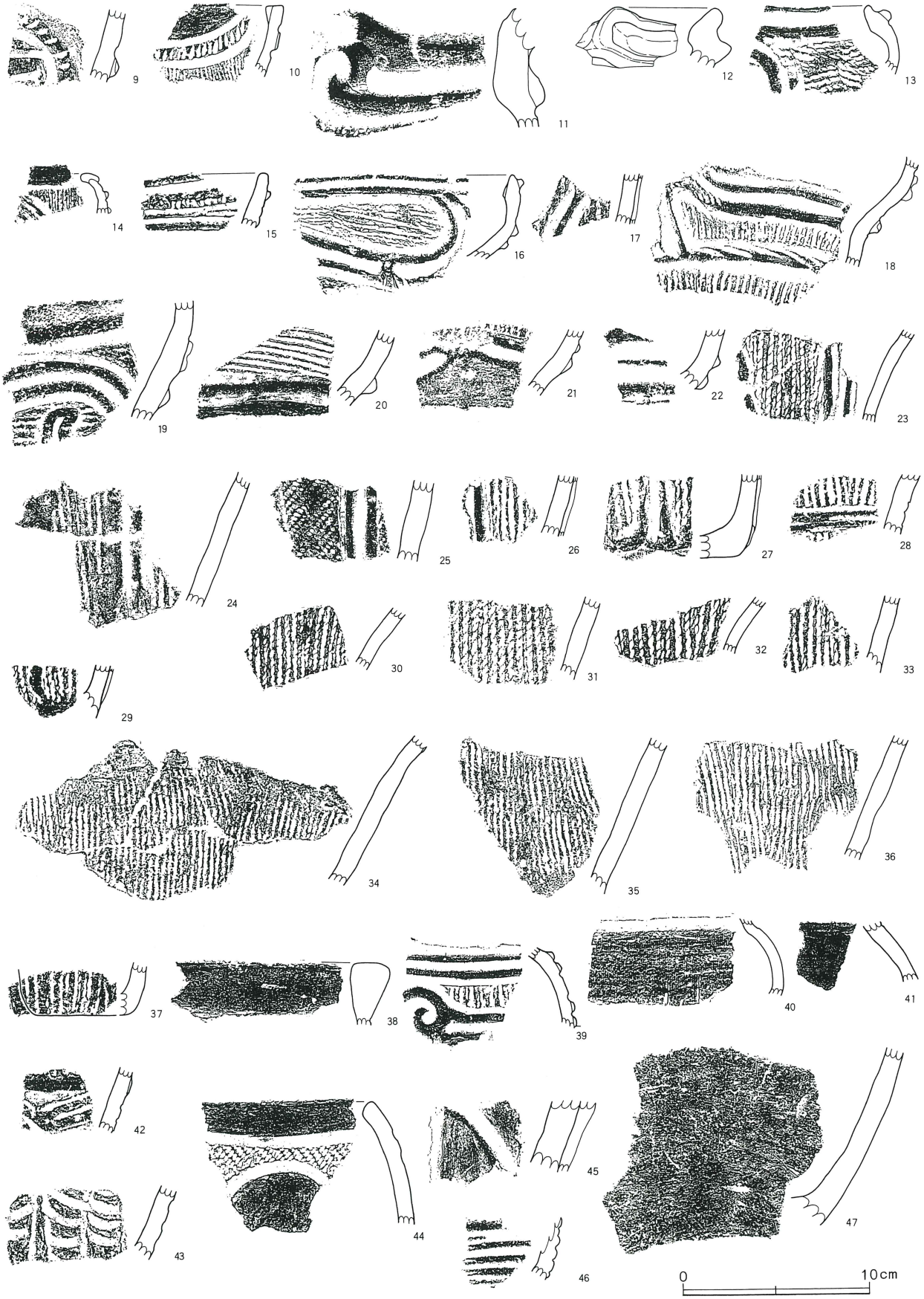
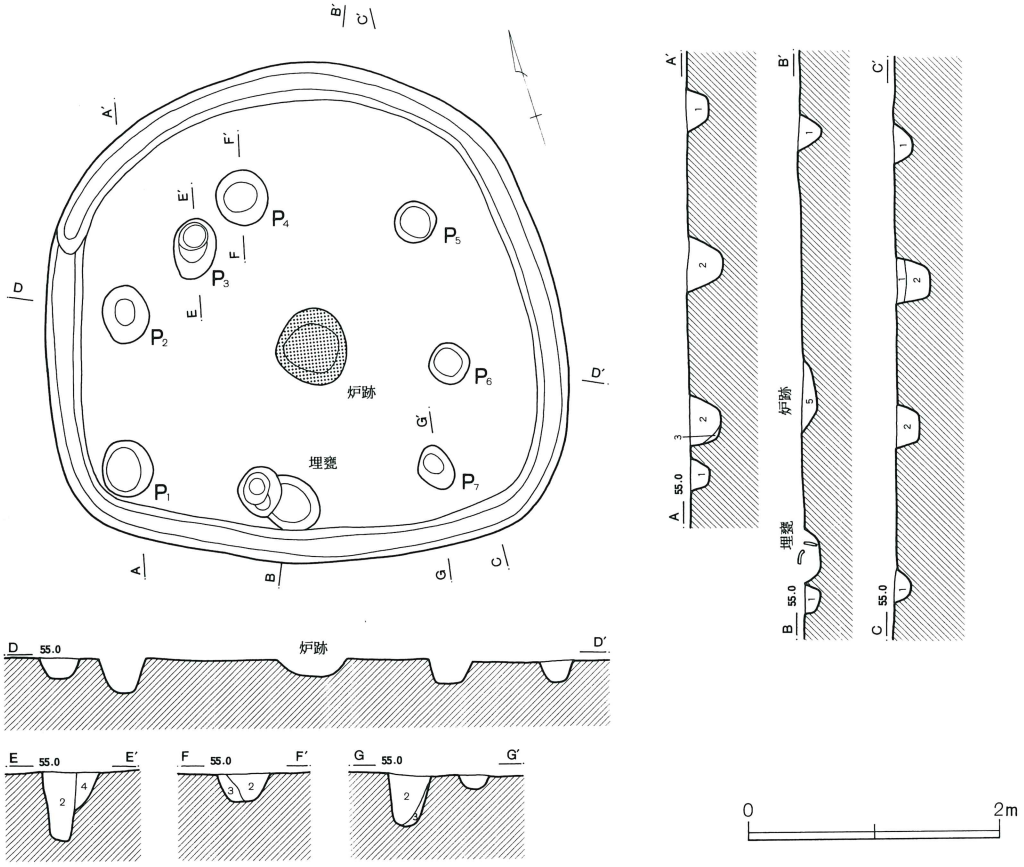
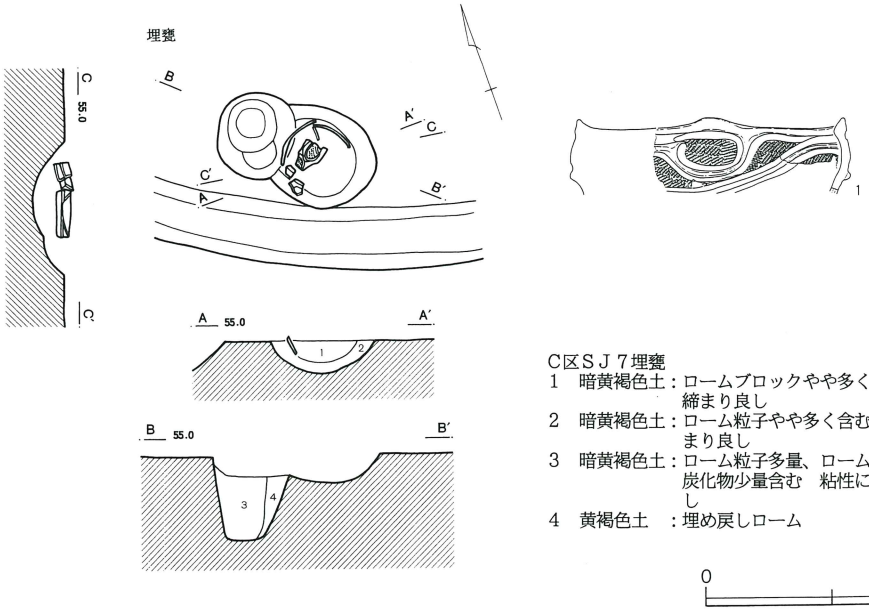
第332図　C区第6号住居跡出土土器（3）



第333図　Ｃ区第７号住居跡

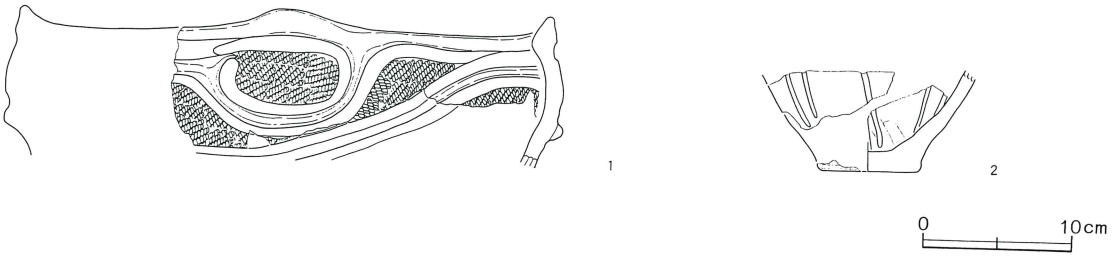


Ｃ区ＳＪ７
1　暗黄褐色土：ロームブロック・ソフトローム多量、炭化物少量含む
　　粘性有り　締まり有り　壁溝覆土
2　暗黄褐色土：ローム粒子多量、炭化物微量に含む　締まり強　粘性強
　　黒色土がしみ状に含まれている
3　黄褐色土　：ロームブロック多量に含む
4　暗黄褐色土：ローム粒子多量、炭化物微量に含む　１層に比べて粘性
　　無く、締まり弱い
Ｃ区ＳＪ７炉跡
5　暗灰褐色土：ロームブロック・焼土ブロック少量含む　粘性を欠き
　　締まり良し



Ｃ区ＳＪ７埋甕
1　暗黄褐色土：ロームブロックやや多く含む　粘性有り
　　締まり良し
2　暗黄褐色土：ローム粒子やや多く含む　粘性有り　締
　　まり良し
3　暗黄褐色土：ローム粒子多量、ロームブロック若干、
　　炭化物少量含む　粘性に富む　締まり良
　　し
4　黄褐色土　：埋め戻しローム

第334図　Ｃ区第７号住居跡出土土器



38～41は浅鉢である。38は無文外屈する口縁である。39は胴上半部に文様帯を持つ。40・41は無文である。

42・43はハの字の短沈線が重畳する曽利系の破片で、より新しい時期のものであろう。44は磨消し縄文が卓越する中期末葉の深鉢である。45は無文地につの状の貼付文がみられる。46は半裁竹管状工具による横位の平行沈線が重畳する。47は無文の胴下半部である。

Ｃ区第７号住居跡（第333図～第334図）

Ｔ・Ｕ－25区に所在する。直径約４ｍ、南西に開く半円形を呈し、主軸方向はＮ－25°－Ｅを指す。遺構検出面でまず炉跡に伴う焼土を検出し、これに付随して埋甕・柱穴・壁溝等を検出したもので、壁及び覆土は残っていなかった。

壁溝は途切れることなく１巡する。重複は観察されなかった。

床面上から８本のピットが検出された。Ｐ３としたものが深さ52cm、Ｐ７が深さ40cmを測るほかはいずれも深さ15～30cm程度である。ピットの分布が密に過ぎるように思われ、全てが本住居跡に伴うものかは確証がなく、柱穴配置は不明である。

炉跡は主軸線上わずかに南壁（＝出入り口）に寄った地点に位置している。直径60cm、深さ12cm、不整円形の地床炉である。

主軸線上南端で壁溝に接して埋甕が検出された。削平・耕作等による破壊を受けているものと思われるが、深鉢口縁から胴上半部を逆位に埋設したものであろう。掘り方は長径50cm、短径40cm、深さ15cmの不整楕円形で丸底のピットである。土器はこのピットの底から数cm浮いた状態で埋設されていた。

前述埋甕のほか、遺構検出面においてごくわずかな遺物が出土した。いずれも中期末葉の土器片である。

出土土器（第334図）

１は埋甕である。キャリパー類の深鉢口縁部で、全周の約1/2が残存している。小波状口縁で、波頂部を起点として入り組み状の渦巻文が描かれる。地文はＬＲ単節の縄文である。現存高10.2cm、口径推定34cmを測るものと思われる。

２は検出面出土の深鉢底部である。平行沈線のみの懸垂文が垂下し、地文はみられない。現存高6.8cm、底径6.2cmを測る。

（２）土壙

Ｃ区からは４基の土壙が検出された。うち２基は近世以降の比較的新しい時期の性格不明の土壙、残る２基が縄文時代の陥とし穴であった。前２者は調査区北端の斜面部分に20ｍあまりの間隔をおいて位置し、後２者は第３・４・６・７号の各住居跡の集中する調査区南端に２基平行して検出された。

Ｃ区第１号土壙（第335図）

Ｑ－35区に所在する。平面形は隅丸長方形で開口部が若干北および東に広がっている。長径2.1ｍ、短径1.05ｍ、深さ1.75ｍを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、遺構検出面から深さ約１ｍのところで北西方向に若干オーバーハングする袋状の土壙である。底面は平坦である。主軸方向はＮ－35.5°－Ｗを指し、等高線にほぼ直交している。

遺物は出土していないが、覆土の特徴が溝の覆土に類似しており、溝の時期が近世以降に比定されていることから、本土壙も同時期のものと判断した。

Ｃ区第２号土壙（第335図）

Ｑ－33区に所在する。隅丸長方形で長径1.45ｍ、短径0.72ｍ、深さ0.63ｍを測る。壁は急傾斜で立ち上がるが、第１号土壙のようにオーバーハングはしない。底面は丸底状である。主軸方向はＮ－73°－Ｅを指し、等高線にほぼ平行している。

遺物は出土していないが、覆土の状態から第１号土壙と同時期のものと考えられる。

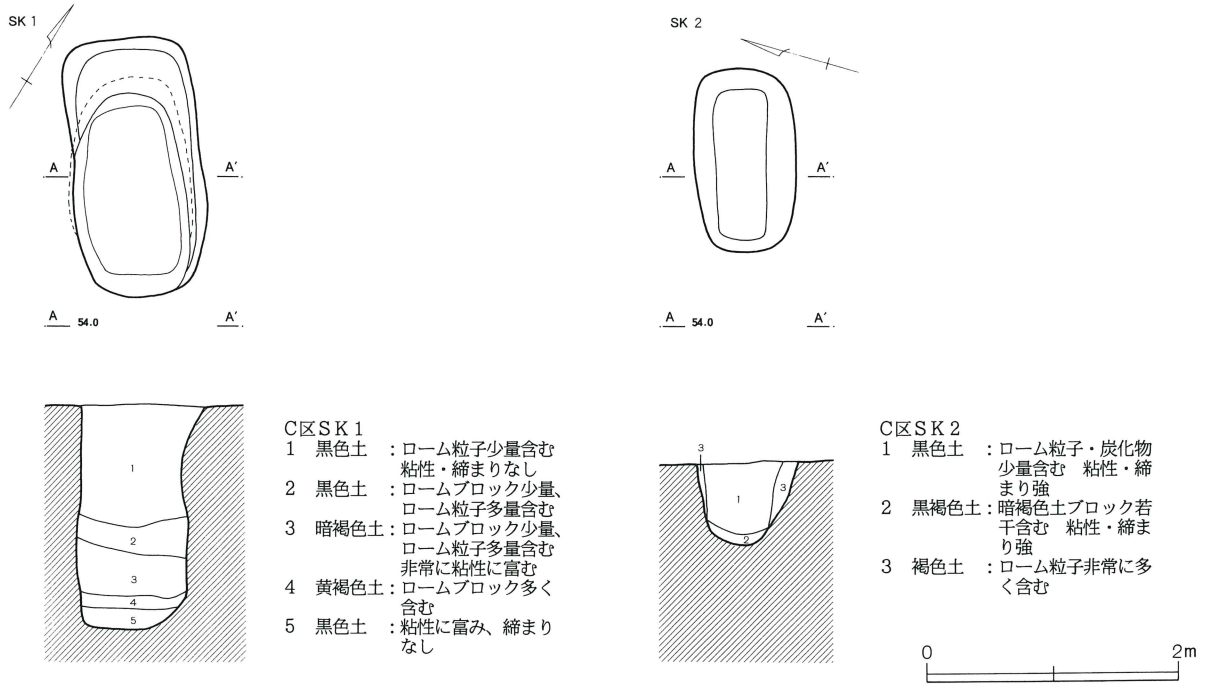
Ｃ区第３号土壙（第336図）

Ｕ－26区に所在する。覆土北半を第14号溝に切られる。南北に長い長楕円形の土壙で長径2.15ｍ、短径0.98ｍ、深さ1.1ｍを測る。主軸方向はＮ－25°－Ｅを指す。

本土壙はいったん幅広く掘りあげた土壙を、両側壁をロームで埋め戻すことでより窮屈な形態に造り直している。これを使用段階の違いと考えて、前者を古段階、後者を新段階と呼称する。新段階の土壙は断面Ｖ字形で、底面はきわめて狭く、長径1.64ｍに対し、幅は15cm程度である。

古段階の土壙は断面Ｕ字形で平底に近い。底面は長径1.8ｍに対し幅40cmである。底面長軸方向に沿って杭跡とみられるピット３基を検出した。ピットは30cm間隔でほぼ１列に並び、直径約10cm、深さは45～55cmである。遺物は出土していない。

第335図　Ｃ区土壙（１）

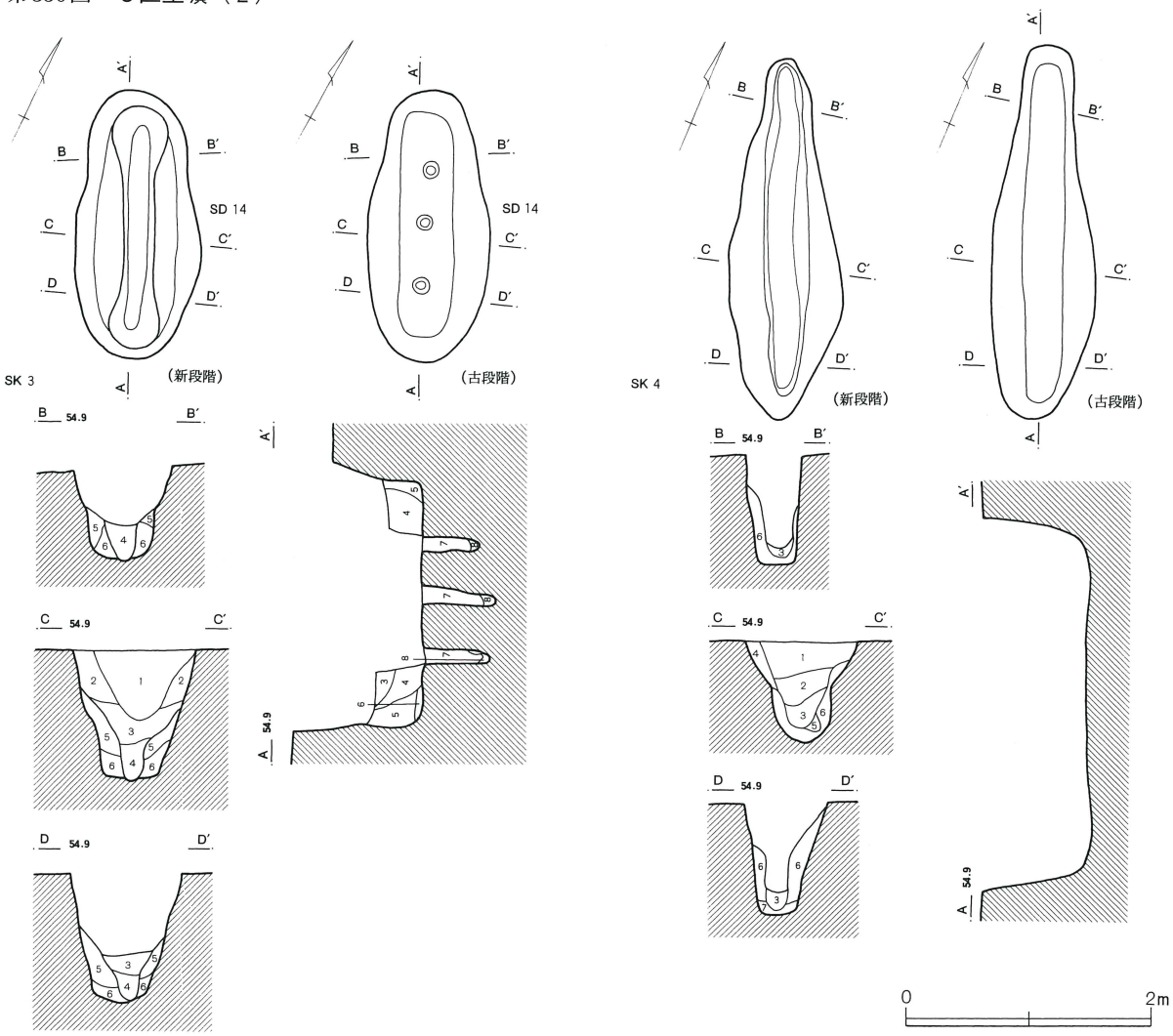


Ｃ区第４号土壙（第336図）

Ｔ－25・26区に所在する。第３号土壙とは約10ｍを隔てて並列の関係にあり、両者は一連のものとして機能していた可能性が高い。長径2.95ｍ、短径0.9ｍ、深さ87cmを測る。主軸方向はＮ－22°－Ｅを指す。

本土壙にも新古２段階の掘り込みが認められる。新段階の底面は断面Ｖ字形で、長径2.6ｍ、幅18cmを測る。古段階の底面は第３号土壙ほどではないが平底に近く、長径2.72ｍ、幅33cmを測る。底面に杭跡は検出されなかった。遺物は出土していない。

第336図　Ｃ区土壙（２）



Ｃ区ＳＫ３
1　黒褐色土：ローム粒子多量、炭化物・白色の粒子（灰？）少量含む　粘性・締まり強
2　暗褐色土：ローム粒子多量、ロームブロック少量、炭化物微量微量含む　粘性あり、締まり良し
3　黄褐色土：ロームブロック極めて多く、ローム粒子多く含む　粘性・締まり強
4　黒褐色土：ロームブロック少量含む　粘性・締まり強
5　黄褐色土：充填されたローム　微量の黒色土を含む　粘性強、堅く締まっている
6　黒色土　：ロームブロック若干含む　粘性あり、締まりあり
7　黒色土　：ロームブロック極めて多く含む　非常に粘性に富み、締まりあり
8　灰色粘土：酸化鉄による汚染あり　粘性に富み、締まり良し
※１～４までが新段階、以下が古段階の覆土

Ｃ区ＳＫ４
1　暗褐色土：ローム粒子少量、炭化物微量、白色粒子少量含む　堅く締まっている
2　暗褐色土：ローム粒子・炭化物、白色粒子多量含む　粘性弱、堅く締まっている
3　暗褐色土：ロームブロック・ローム粒子多量、炭化物・白色粒子微量含む　粘性あり、堅く締まっている
4　褐色土　：ロームブロック・ローム粒子多量含む
5　黒褐色土：ロームブロック少量含む　粘性・締まり強
6　黄褐色土：充填されたローム　微量の黒色土を含む　粘性強、堅く締まっている
7　黒色土　：ロームブロック若干含む　粘性あり、締まりあり
※１～４までが新段階、以下が古段階の覆土

（３）埋甕

Ｃ区からは２基の埋甕が発見された。いずれも縄文時代中期末葉のものであり、Ｃ区で検出された縄文時代の住居跡の大半と時期的なずれを示している。もっとも、２基の埋甕が共に胴部中段から上を失っていたという残存状態の悪さ、またＣ区で唯一の中期末葉の住居跡である第７号住居跡が壁の立ち上がりをほとんど残していなかった事実を併せ考えるならば、これらの埋甕は本来竪穴住居跡に伴っていた可能性も拭いきれないものがある。しかし、調査段階ではこれを裏付けるなんらの証拠も発見できなかったので、単独の埋甕として報告するものである。

Ｃ区第１号埋甕（第337図・第338図）

Ｓ－34区に所在する。遺跡の所在する台地の北斜面の半ば近くに位置しており、今回の調査で調査された縄文時代の遺構としてはもっとも北に位置している。出土地点が発掘区の壁から１ｍと離れていないため、本埋甕以外に何らかの施設を伴っていた可能性もある。

埋甕は深鉢胴下半部を正位に埋設したものである。下面に土器本体よりもかなりサイズの大きな堀り方を伴っている。堀り方は東西に長い楕円形で、長径38cm、短径34cm、深さ12cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面平坦な鍋底状のピットである。土器はこのピットの底面からわずかに浮いた状態で埋設されていたが、底部を除けばほとんど破片の状態であり、近世以降の人為的な地形改変の影響で大がかりな破壊を被っている可能性が高い。土器内部には礫１点が落ち込んでいた以外なんらの遺物も出土しなかった。

埋甕の時期は縄文時代中期末葉と考えられる。

出土土器（第338図）

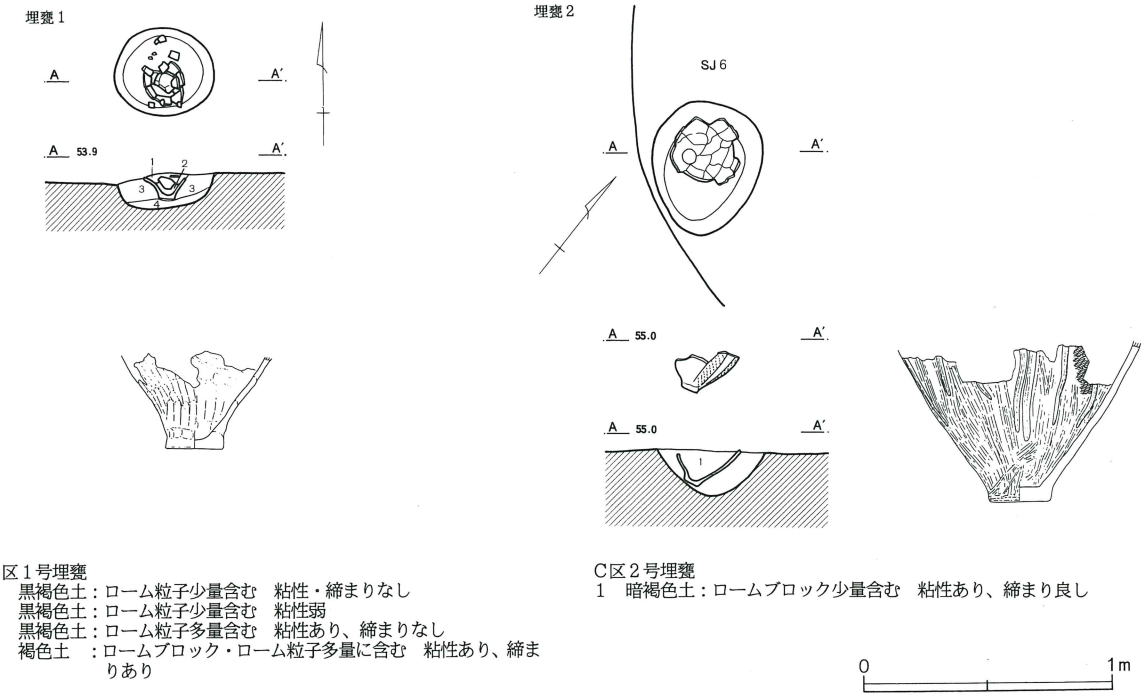
１は１号埋甕として埋設されていたもので、深鉢底部から胴下半部にかけて残存する。底部直上にくびれを持ち、胴下半部にかけて急速に膨らむもので、両耳壷の可能性もある。文様は施文されず、全面に箆状の工具による幅広の研磨調整が徹底される。最大径20cm、現存高12.8cm、底径7.6cmを測る。

Ｃ区第２号埋甕（第337図・第338図）

Ｕ－26区に所在する。第６号住居跡覆土を切っている。

土器は深鉢胴下半部を斜位に埋設しており、下面に土器本体より幾分規模の大きな堀り方を伴っている。

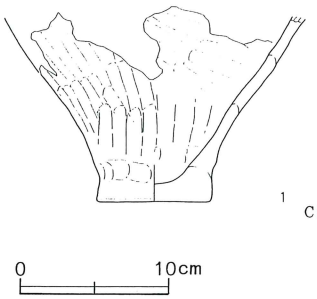
第337図　Ｃ区埋甕

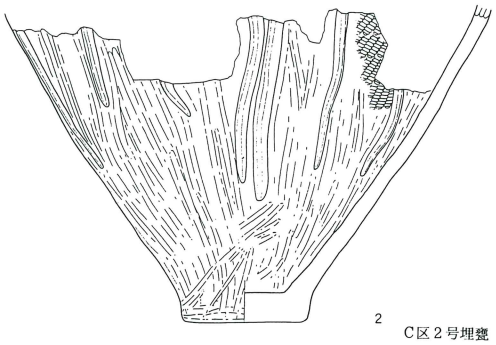


Ｃ区１号埋甕
1　黒褐色土：ローム粒子少量含む　粘性・締まりなし
2　黒褐色土：ローム粒子少量含む　粘性弱
3　黒褐色土：ローム粒子多量含む　粘性あり、締まりなし
4　褐色土　：ロームブロック・ローム粒子多量に含む　粘性あり、締まりあり

Ｃ区２号埋甕
1　暗褐色土：ロームブロック少量含む　粘性あり、締まり良し

第338図　C区埋甕出土土器





堀り方は北西－南東方向に長い不正楕円形を呈し、長径51cm、短径43cm、深さ18cmを測る。開口部に対し底面の小さな擂鉢状のピットである。

土器はピットの南西側斜面に底部をもたせ掛けた状態で、口縁を北東方向に傾けて出土している。

埋甕の時期は縄文時代中期末葉と考えられる。

出土土器（第338図）

２は２号埋甕として埋設されていたもので、深鉢胴下半部である。胴部に単独ないし２本一組の微隆起線による懸垂文が垂下し、部分的にＲＬ単節の縄文が縦位回転で施文される。縄文施文部以外では縦位の研磨調整が徹底される。最大径32cm、現存高20.2cm、底径8.3cmを測る。

（４）溝

Ｃ区からは16条の溝が検出された。溝の性格は道路の側溝・地割りなどが考えられる。

Ｃ区第１号溝（第339図）

Ｓ－27・28区、Ｔ－27・28区を中心に所在する。南半部が調査区域外に外れている。いったん北走した溝が直角に近い角度でコの字形に屈曲し、再び南走して全体として長方形の区画を造り出している。

区画の東西幅は溝内周部分で4.6ｍを測る。発掘された範囲における南北長は21.2ｍを測る。溝は断面薬研状を呈し、最大幅0.98ｍ、深さ0.52ｍを測る。

区画内に何らかの施設が存在したのではないかと考え、遺構の検出に努めたが、ごく浅い落ち込みが無数かつ不規則に検出されたのみであり、それらについても根穴や地山の汚れと紛らわしいものであったため、遺構図中には表現しなかった。

Ｃ区第２号溝（第340図）

Ｐ・Ｑ・Ｒ・Ｓ・Ｔ－33区に所在する。調査区を東西一直線に横切る溝で、第４・５号溝に合流する。総延長32.5ｍ余り、最大幅1.5ｍ、深さ62cmを測る。

Ｃ区第３号溝（第340図）

Ｒ・Ｓ・Ｔ－32区に所在する。第２号溝と平行して東西に走る溝である。総延長14.7ｍ、最大幅75cm、深さ75cmを測る。

Ｃ区第４・５号溝（第340図）

Ｑ・Ｒ－34区、Ｒ・Ｓ・Ｔ－34区に所在する。第４号を第５号が切っている。総延長は28.2ｍ、最大幅２ｍ、深さ81cmを測る。

Ｃ区第６・７号溝（第341図）

Ｑ・Ｒ－37区に所在する。調査区最北端を東西に並行して走る溝で、第６号溝は総延長11ｍ、幅1.5ｍ、深さ75cm、第７号溝は総延長12.5ｍ、幅２ｍ、深さ87cmを測る。

Ｃ区第８号溝（第340図）

Ｓ－34・35区に所在する。第９号溝と平行に走り、南端でわずかに蛇行する。総延長11ｍ、幅80cm、深さ40cmを測る。

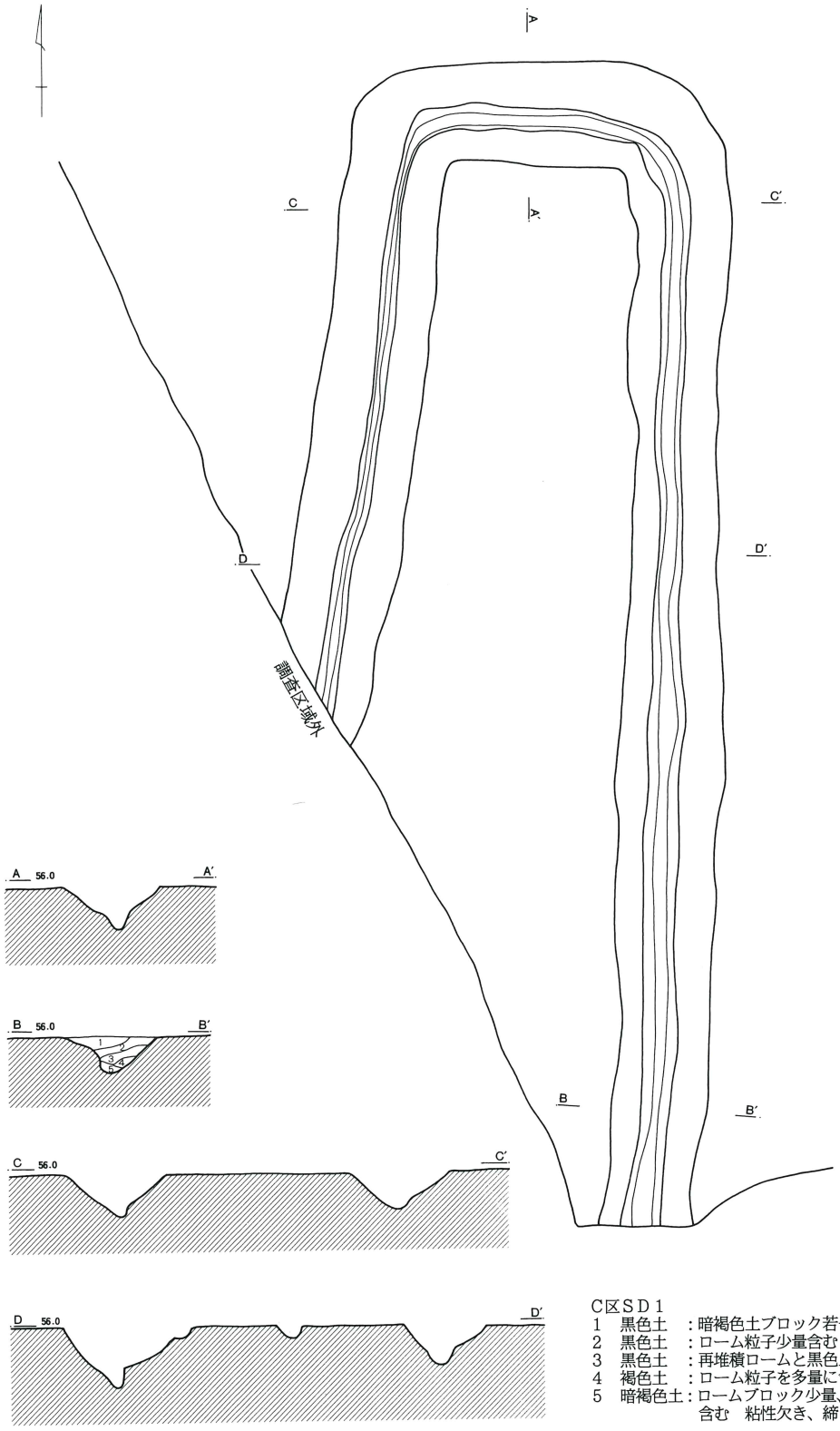
Ｃ区第９号溝（第340図）

Ｒ－34区、Ｓ－33・34区に所在する。第10・11号溝に連続する。総延長15.5ｍ、最大幅36cm、深さ30cmを測る。

Ｃ区第10・11号溝（第340図）

Ｑ－33・34区、Ｒ－33・34区に所在する。東で第９

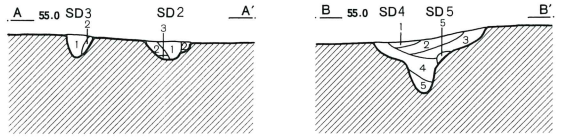
第339図　C区溝（1）

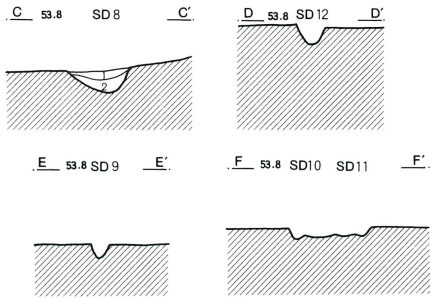


C区SD1
1　黒色土　：暗褐色土ブロック若干含む
2　黒色土　：ローム粒子少量含む　粘性なし、締まりなし
3　黒色土　：再堆積ロームと黒色土の互層を成す
4　褐色土　：ローム粒子を多量に含む
5　暗褐色土：ロームブロック少量、ローム粒子多量、焼土ブロック若干含む　粘性欠き、締まりなし

0　2m

第340図　C区溝（2）





0　2m

C区ＳＤ２
1　黒色土　：ロームブロック・ローム粒子少量含む　締まりなし
2　黒色土　：ローム粒子少量含む　締まりなし
3　黒褐色土：ロームブロック・ローム粒子多量含む　締まりなし
C区ＳＤ３
1　黒色土　：ロームブロック・ローム粒子少量含む　締まりなし
2　黒色土　：ローム粒子少量含む　締まりなし
C区ＳＤ４・５
1　黒色土　：ローム粒子少量含む　締まりなし
2　黒色土　：ロームブロック多量含む　締まりなし
3　黒色土　：ローム粒子少量含む　締まりなし
（以上、ＳＤ５覆土）
4　黒褐色土：ロームブロック微量、ローム粒子多量含む
5　黒褐色土：ロームブロック・ローム粒子多量含む　締まりなし
C区ＳＤ８
1　耕作土
2　黒色土　：ロームブロック・ローム粒子多量含む　人為的埋め戻し

号溝から連続し、西に向かって二叉に広がっている。総延長20ｍ、最大幅40cm、深さ30cmを測る。

Ｃ区第12号溝（第340図）

Ｓ－34区に所在する。総延長3.8ｍ、最大幅60cm、深さ30cmを測る。

Ｃ区第13号溝（第342図）

Ｔ・Ｕ－26区、Ｕ・Ｖ－27区に所在する。第４号住居跡覆土を切っている。総延長24ｍ、幅1.3ｍ、深さ20cmを測る。

Ｃ区第14号溝（第342図）

Ｔ・Ｕ・Ｖ・Ａ－26区に所在する。第３号土壙覆土を切っている。総延長35.5ｍ、幅2.5ｍ、深さ75cmを測る。

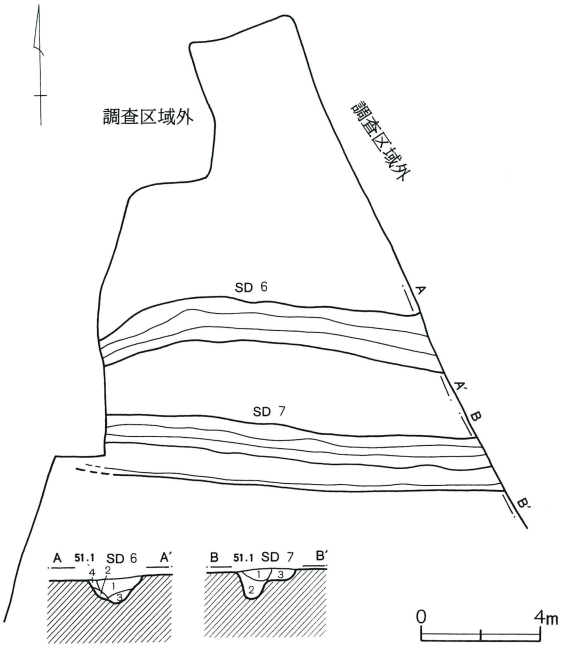
Ｃ区第15号溝（第342図）

Ａ－26区に所在する。北端で第14号溝に合流する。総延長2.2ｍ、幅50cm、深さ50cmを測る。

Ｃ区第16号溝（第342図）

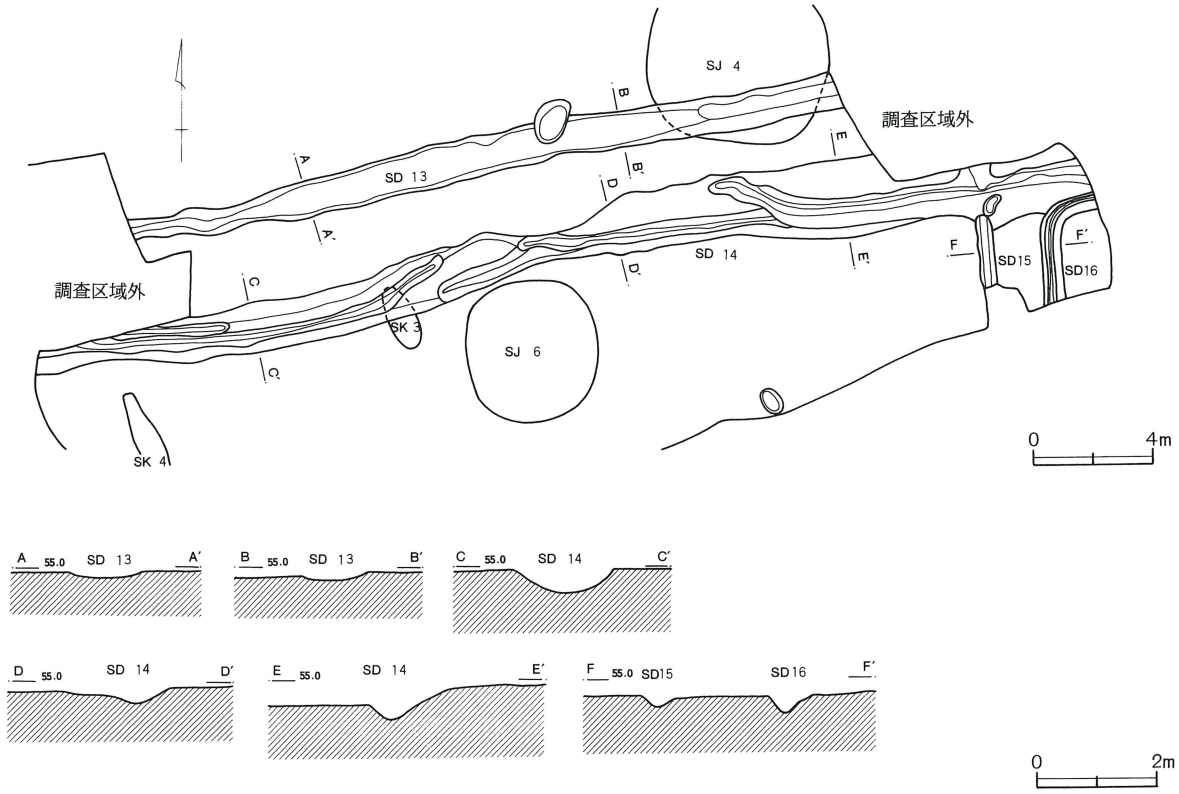
Ａ－26区に所在する。北端で第14号溝に合流する。総延長3.7ｍ、幅65cm、深さ30cmを測る。

第341図　Ｃ区溝（３）



Ｃ区ＳＤ６
1　黒色土　：ローム粒子少量含む　粘性弱、締まりなし
2　黒色土　：ロームブロック・ローム粒子多量含む
3　黒色土　：ロームブロック多量含む
4　黒褐色土：暗褐色土ブロック若干含む
Ｃ区ＳＤ７
1　黒色土　：ロームブロック多量含む　粘性・締まりなし
2　黒色土　：粘性・締まりなし
3　黒褐色土：ローム粒子含む　粘性・締まりなし

第342図　Ｃ区溝（４）



（５）グリッド出土土器（第343図・第344図）

１はキャリパー類深鉢の口縁部大破片である。４単位の波状口縁をなすものと思われ、口端上にわらび手状の沈線が巡らされる。口縁部文様帯には二本隆帯によるＳ字文が描かれるが、波状口縁の波頂部においてはこの隆帯が口縁部突起と融合し、立体的なＸ字状の突起を形成する。地文はＲＬ単節の縄文であり、縦位回転で施文される。頚部には無文帯が存在する。復元最大径52.2cm、現存高18.5cmを測る。

２は勝坂式の胴部である斜位の刻みを伴う隆帯によって区画文が構成される。区画内部には沈線文や刺突列が充填される。３は軽微に内屈する深鉢口縁部である。口唇直下には１条の隆帯が巡る。口縁部文様帯は長方形の沈線区画が描かれ、内部には横位の平行沈線が密に充填される。４は深鉢頚部のくびれの部分である。二本隆帯による横位の区画が施され、眼鏡状の突起が配される。胴部は隆帯による横楕円形の区画にそってキャタピラ文が施文される。５は隆帯によるＪ字のモチーフが描かれる。６は阿玉台式の流れをくむ土器である。地文縄文で、交差する隆帯に沿って結節沈線文が施文される。７は地文縄文上に沈線によるなぞりを伴う隆帯によって文様が描かれる。

８は深鉢頚部で、刻みを伴う横位の隆帯が多段に巡らされる。胴部には長方形の沈線区画が描かれる。９は内屈する深鉢口縁である。斜位の平行沈線により構成された三角形の区画内部に同心円文が充填される。

10はキャリパー類深鉢の口縁部文様帯で、頚部との境を区画する２本一組の隆帯である。地文は縦位の撚糸文で、頚部無文帯は存在しない。11は同じくキャリパー類の深鉢胴下半部で、地文撚糸文上に隆帯による蛇行懸垂文が垂下する。12は連弧文系の深鉢胴部で、櫛歯状工具による条線である。

13～16はキャリパー類深鉢の口縁部である。隆沈線による渦巻文および楕円区画文が描かれ、13・14は波状口縁、それ以外は水平口縁であると思われる。17は二本隆帯による渦巻文が描かれる深鉢胴部である。隆帯間にはＲＬ単節の縄文が充填施文される。18は微隆起線による一段懸垂文が描かれる胴部である。19は磨消し縄文による鋸歯状モチーフがみられる。20・21は磨消し懸垂文の深鉢胴部である。21は全面に研磨が施され、地文がほとんど消されている。

22は隆沈線による渦巻文の一部と考えられる。両耳壺の胴上半部であろうか。23・24は両耳壺胴上半部である。23はキャリパー類口縁部文様帯由来の区画文が描かれる。区画内部にはＲＬ単節の縄文が施文され、胴下半部には櫛歯状工具による縦位の条線が施文される。24は肩部の把手接続部分である。頚部との境に段を有し、頚部は無文、胴部は地文として棒状工具による縦位の集合沈線が施文される。

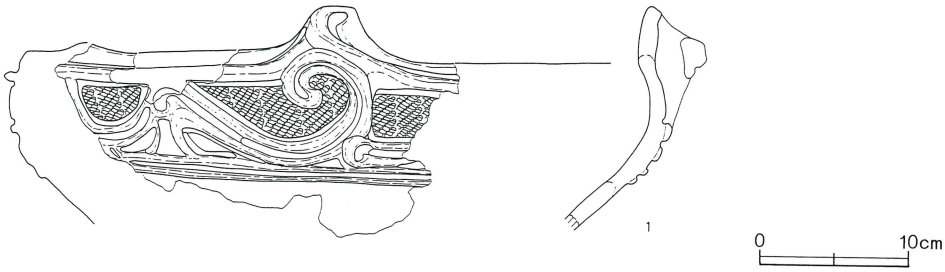
25は小型深鉢の底部で、縦位の撚糸文が施文される。26は立ち上がりの角度から浅鉢底部と思われるものである。

（６）土製品（第345図）

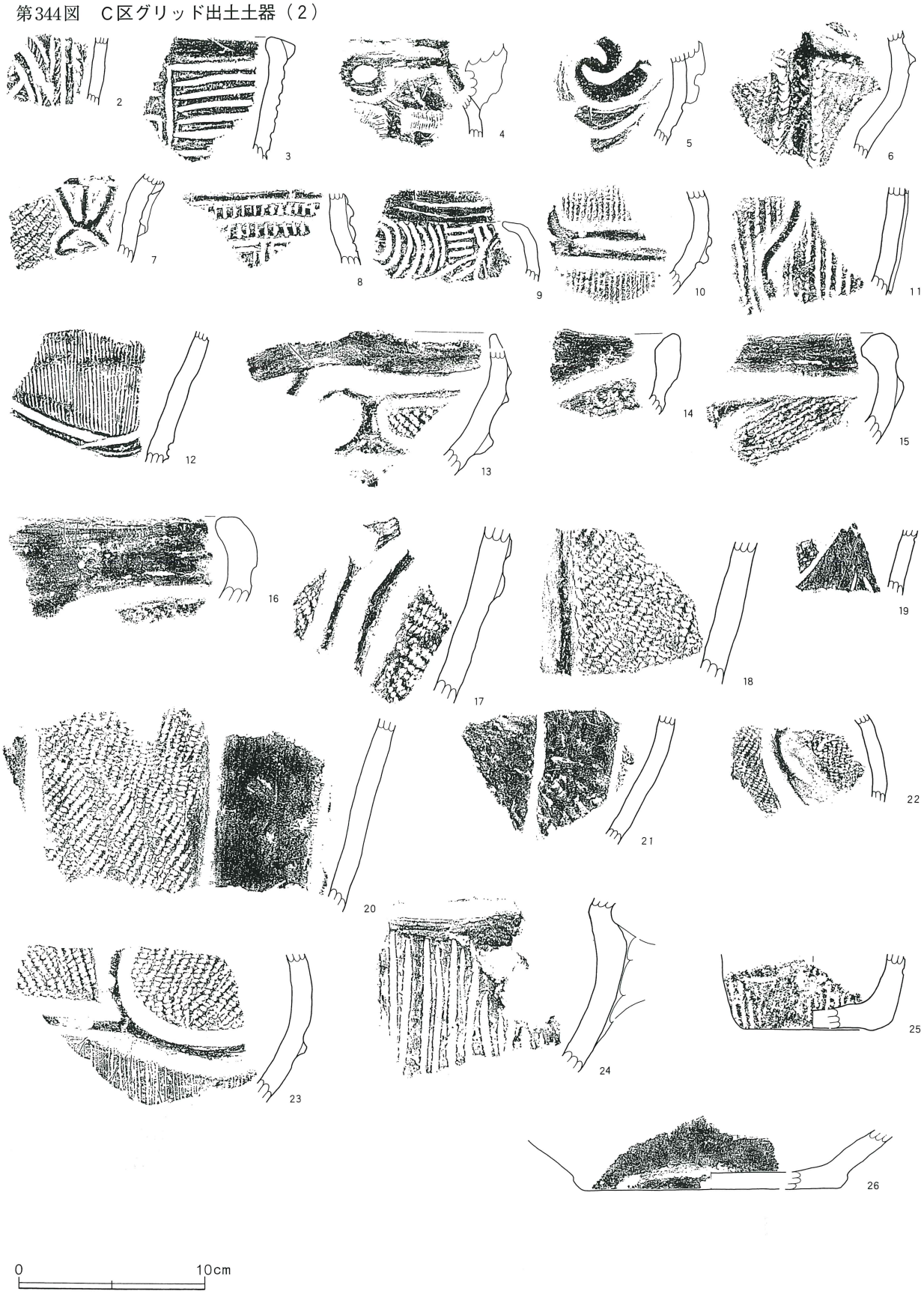
１はミニチュア土器である。無文で、胴下半部がソロバン玉状に張り出す。屈曲部分から上には手づくねの際の指頭圧痕が残るが、底部付近では横位のなで調整が施されている。最大径2.4cm、器高1.5cmを測る。

２はミニチュアの器台である。小型の台付き土器の脚台部である可能性もある。無文で、横位のなで調整が施され、周囲には貫通孔が巡らされる。復元最大径

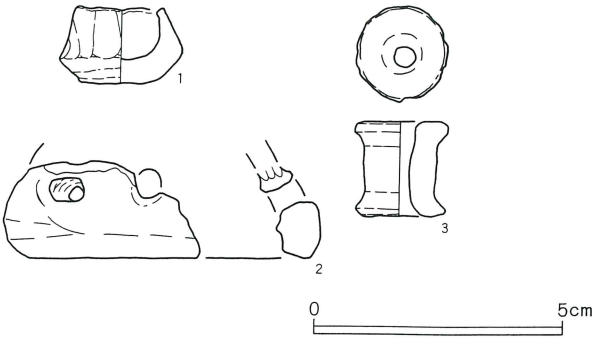
第343図　Ｃ区グリッド出土土器（１）



第344図　C区グリッド出土土器（2）



第345図　C区出土土製品



6.3cm、現存高1.9cmを測る。

3は耳栓である。中央に貫通孔を有する滑車型で、部分的に赤色顔料が残存する。直径1.9cm、厚さ1.8cmを測る。

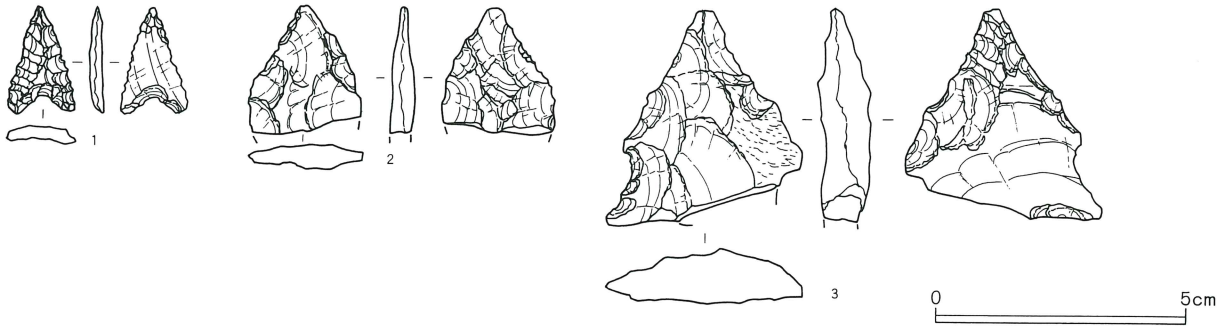
（7）石器（第346図～第350図）

C区においては縄文時代の遺構覆土を中心としてまとまった量の石器が出土している。個別の石器の計測値など詳細については一覧表にゆだねることとして、ここでは特徴的なものについて取り上げる。

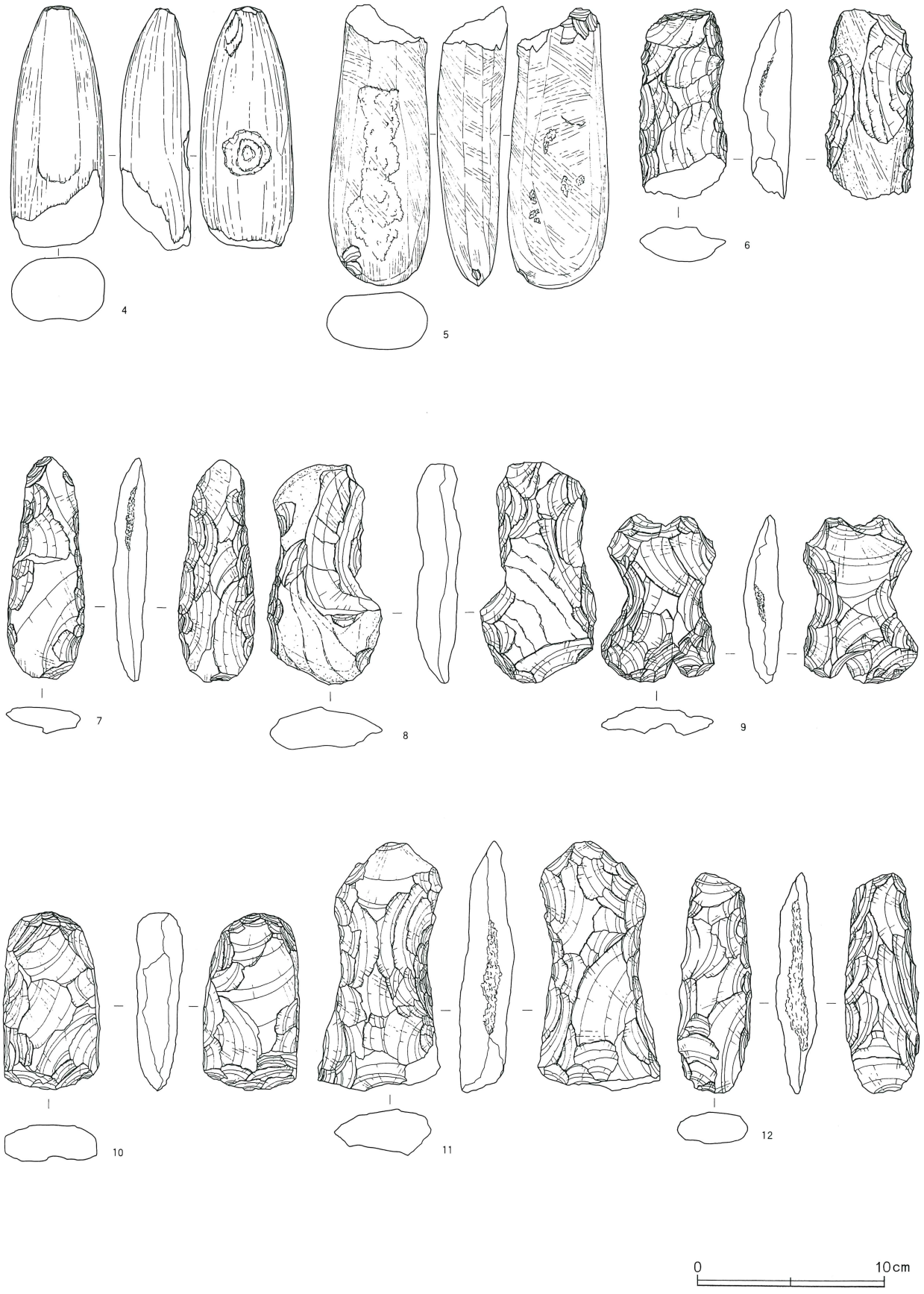
4は第3号住居跡から出土した磨製石斧の破損品である。使用段階で刃部を欠損したものと思われ、破砕面をハンマーとして再利用している可能性がある。さらに、胴部片面に凹部がみられ、凹み石として再利用している。9は分銅型の打製石斧であるが、両端の刃部中央にそれぞれ抉入がみられる。本資料は破損や摩耗などを契機として石錘か、編み物石として転用されたものと考えられる。

図版番号	出土地点	器種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	石質	備考
第346図　1	SJ3	石鏃	2.10	1.40	0.30	0.61	チャート	
第346図　2	SJ3	石鏃	(2.60)	2.30	0.50	2.55	チャート	
第346図　3	SJ3	石鏃	(4.40)	3.95	2.10	12.22	チャート	
第347図　4	SJ3	磨製石斧	(12.95)	5.00	3.85	419.00	砂岩	
第347図　5	SJ1	打製石斧	(14.95)	5.35	3.35	465.00	硬砂岩	
第347図　6	SJ3	打製石斧	(10.10)	4.60	1.90	140.00	砂岩	
第347図　7	SJ5	打製石斧	11.80	4.00	1.30	103.00	ホルンフェルス	
第347図　8	SD1	打製石斧	11.70	6.10	2.00	174.00	ホルンフェルス	
第347図　9	SD1	打製石斧	9.00	6.00	1.20	105.00	ホルンフェルス	
第347図　10	SD2	打製石斧	9.40	5.10	1.90	175.00	粘板岩	
第347図　11	T-24	打製石斧	12.90	6.10	2.30	242.00	安山岩	
第347図　12	V-28	打製石斧	11.60	3.70	1.60	109.00	粘板岩	
第348図　13	一括	敲石	15.00	12.40	5.20	1336.00	砂岩	
第348図　14	SD14	磨石	(9.40)	5.20	3.40	307.00	蛇文岩	
第348図　15	T-30	磨石	8.50	9.10	5.10	621.00	ホルンフェルス	
第348図　16	V-29	磨石	(6.80)	10.70	3.70	412.00	安山岩	
第349図　17	C-2	磨石	(12.50)	9.40	4.00	660.00	砂岩	
第349図　18	SJ2	敲石	14.50	6.30	5.20	603.00	砂岩	
第349図　19	V-28	磨石	12.50	9.40	4.00	599.00	砂岩	
第349図　20	SJ5 炉8	石皿	(12.30)	(14.20)	1.30	348.00	緑泥片岩	
第349図　21	SJ4	石皿	(17.20)	(13.20)	4.30	1432.00	緑泥片岩	
第349図　22	SD1	石皿	(11.60)	(10.30)	6.00	1090.00	安山岩	
第350図　23	SJ1	石皿	(40.30)	(23.10)	7.50	6515.00	緑泥片岩	

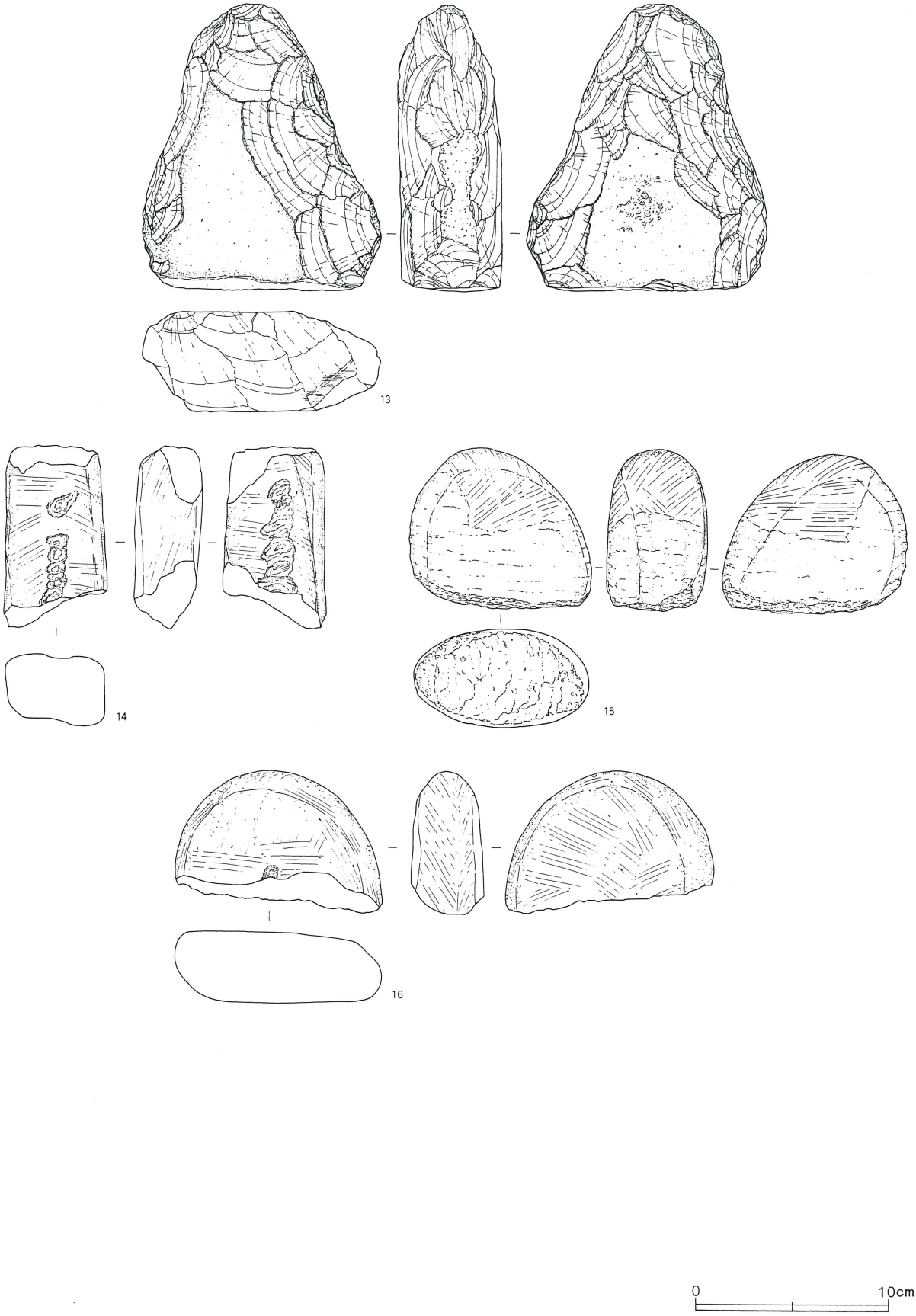
第346図　C区出土石器（1）



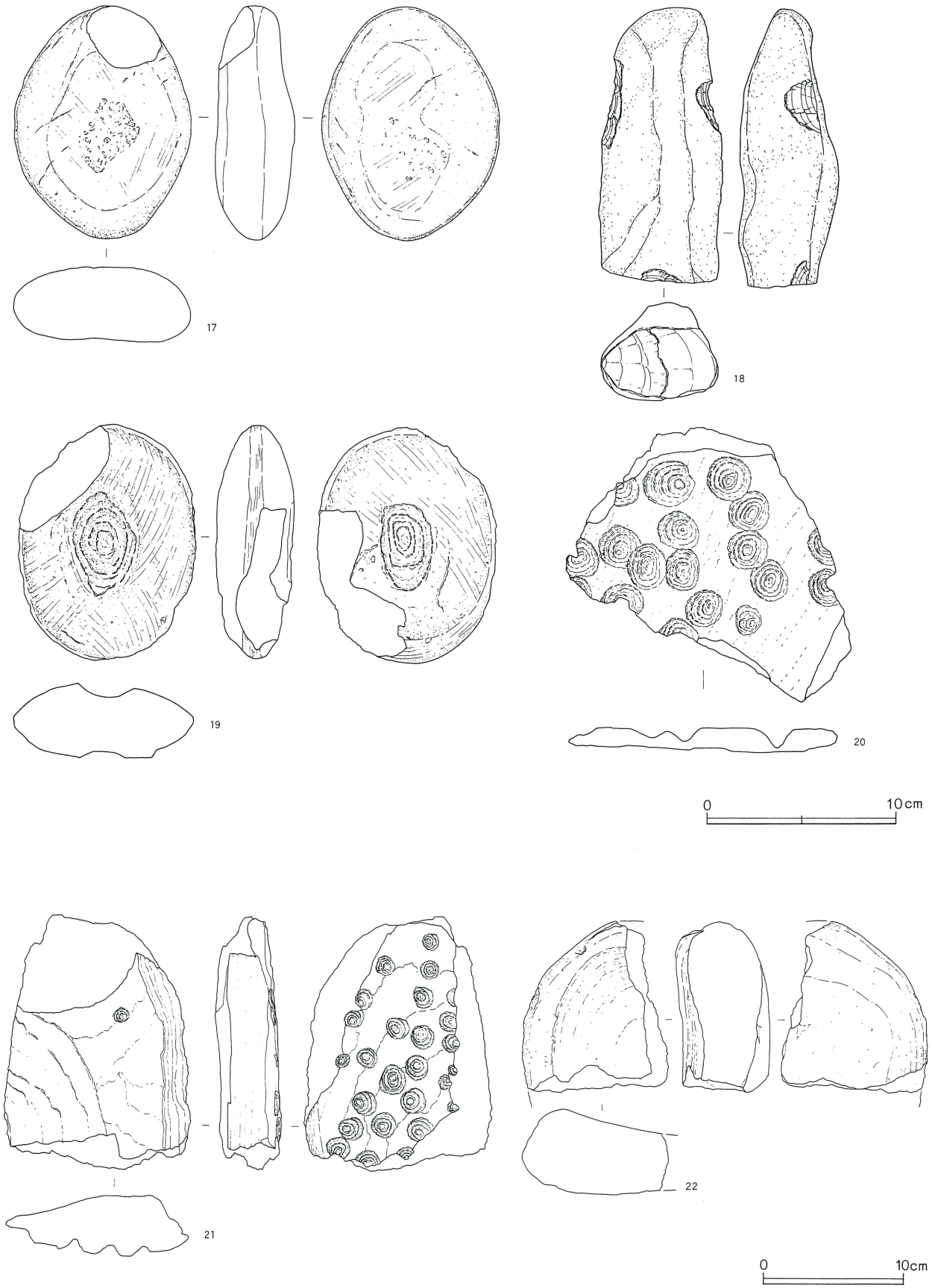
第347図　C区出土石器（2）



第348図　C区出土石器（3）



第349図　C区出土石器（4）



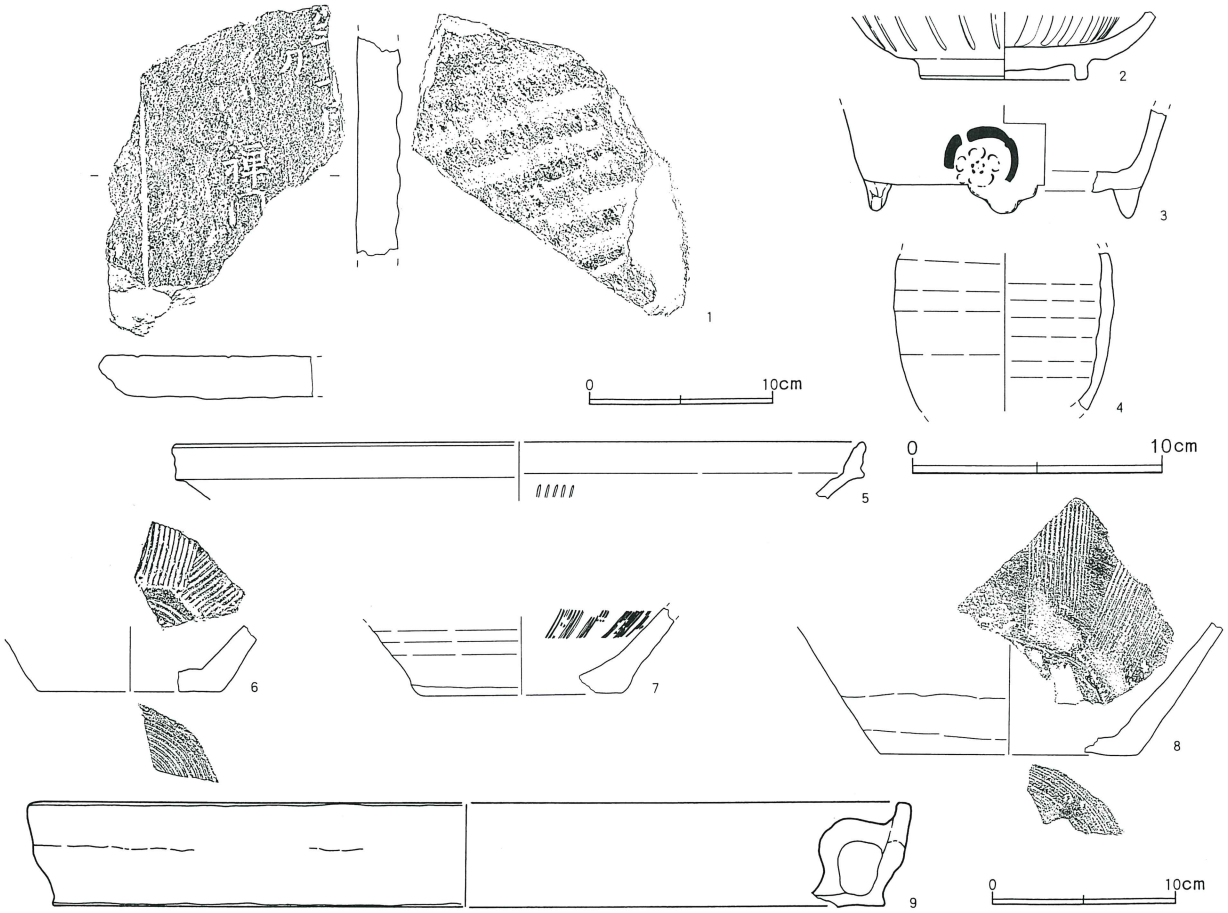
第350図　C区出土石器（5）

10は打製石斧の範中に含めたが、全体に肉厚で縦断面がくさび状を呈し、両面からの細かな剥離によって基部に丸みを持たせるなど、他の打製石斧とは明らかに異なった特徴を持つものである。側縁には節理面を残し、敲打によるつぶしはみられない。

13は敲打具と思われるものである。両側面に自然面を残し、下方に同一方向からの数度の剥離により平坦面をつくりだし、残る三方向は両面からの細かな剥離によって凡字形の握りをつくりだしている。下方の平坦面を使用面＝加撃部分と考えるべきところだが、この面は一部に若干の摩耗がみられた他、頻繁な使用による破損・消耗を思わせる痕跡を残していない。15は半円形の磨石の平坦な面を敲打具として使用するもので、器種としては13の資料と同種のものであろう。円形の磨石の破損品を転用したものとも考えられる。

23は大型の石皿片で、第3号住居跡の炉石として転用されていたものである。ほとんど自然のままの緑泥片岩の板石の一面を磨面としたもので、裏面はいわゆる蜂の巣石として転用されている。

第351図　中・近世の遺物



（8）中・近世の遺物（第351図）

1は板碑の破片である。銘文が彫られており、かろうじて「□□年□寅十月」と読める。その左脇には「禅門」と彫られている。

2は陶器の皿である。口縁部は菊の花弁状になっている。高台付近を除き緑釉で施釉されている。胎土の色調は淡褐色である。見込みには3か所目痕が残る。17世紀代の瀬戸・美濃の製品と思われる。

3は陶器の香炉である。脚部は花弁状に切り込みが入っている。小破片なので、脚の数は解らない。胴部外面は長石釉で施釉されている。脚の上の部分に梅の花が鉄釉で型紙刷り絵される。17世紀代の瀬戸・美濃の製品と思われる。

4は陶器の徳利である。外面は鉄釉で施釉されている。18世紀前半の瀬戸・美濃の製品と思われる。

5は陶器の擂鉢の小破片である。推定口径は37cmである。薄手の作りで、胎土が暗灰色なので、丹波地方の製品で、時期は17世紀後半と思われる。

6は陶器の擂鉢である。内外面ともに鉄釉で施釉されている。擂り目は粗いが密に入る。底部外面は回転糸切り無調整である。18世紀代の瀬戸・美濃の製品と思われる。

7は陶器の擂鉢である。内外面ともに鉄釉で施釉されている。擂り目は細かく、密に入る。内面は良く使い込まれており、擂り目もすり減って浅い。18世紀代の瀬戸・美濃の製品と思われる。

8は陶器の擂鉢である。内外面ともに鉄釉で施釉されている。擂り目は細かく、17条で一単位である。底部外面は回転糸切り無調整である。18世紀代の瀬戸・美濃の製品と思われる。

9は在地産の焙烙の小破片である。推定口径は48cmである。砂粒を多く含み、暗褐色を呈する。把手が底面に付いているので17世紀以降のものである。

Ⅶ　D区の調査

1．調査の概要

D区は平成７年度の調査の中心となった地点である。北は川越線をはさんでC区に隣接し、南は市道をはさんでA区に隣接する。

第１分冊の凡例で述べたとおり、C・D区におけるグリッド進行は変則的なものとなっている。具体的には、D区における18のラインがA区における１のラインに、D区における17のラインがA区における２のラインにそれぞれ対応している。

このように、D区南半部ではグリッド進行上いわば二重のナンバリングがなされているわけだが、本章においては記載の一貫性を確保するために、調査区南端を16のラインとし、これより北に向かって17、18、19と推移するA区とは逆のグリッド進行を採用する。

さて、D区から検出された遺構の種類および数は、住居跡62軒、掘立柱建物跡１棟、土壙42基、配石遺構１基、溝２条であった。これらのうち、溝が近世以降のものと考えられるほかは縄文時代中期後葉から末葉の遺構である。

縄文時代の遺構の大半は調査区南半部分に集中している。特に17～19ライン上には住居跡の大半が密集している。これはA区の住居跡群からの延長と考えられる。

表土は薄く、現耕作土を除去すると同時に多量の遺物が出土し始め、この段階で住居跡に伴う複数の炉跡・埋甕がすでに露出していた。まさに足の踏み場もないほどの切り合いに加えて、トレンチャーの撹乱が縦横に走っており、この区域の遺構の検出は困難を極めた。

調査区北半部にも若干の住居跡が検出されているが、これらは２～３軒を単位とする２つの小群を形成し、互いに距離をおいて分布している。表土は薄く、耕作は住居跡の床面付近にまで及んでおり、遺構の残存状態は不良であった。

住居跡は明確な掘り込みが確認されたもののほかに、壁がほとんど残存せず、遺構検出面において直に壁溝を検出したものも多い。何例かは壁溝内部に炉跡や埋甕を伴っていたが、逆に炉跡と埋甕だけが検出され、柱穴や壁溝が検出されなかったものも少なくない。

柱穴と思われるピット群だけが巡り、炉跡等が検出されないものもA区に引き続いて検出されている。

住居跡の時期は加曽利EⅡ（新）～EⅢ段階にほぼ限定されており、その前後の時期をほとんど交えていない。きわめて短期間のうちに数十軒単位の切り合いが形成されたことになり、そのサイクルの早さには目を見張るものがある。

掘立柱建物跡は１棟のみ検出された。A区の建物跡群の延長線上に存在し、長軸を東西に向けている。今回は検出できなかったが、同一ライン上にさらに多くの建物跡が存在した可能性もある。遺構の時期は周囲の住居跡群とほぼ同時期であるものと思われる。

土壙は調査区全体に分布するが、やはり17～19ライン上の遺構集中区に大半が存在している。時期は住居跡群とほぼ同時期で、これより若干古いものも存在するようである。

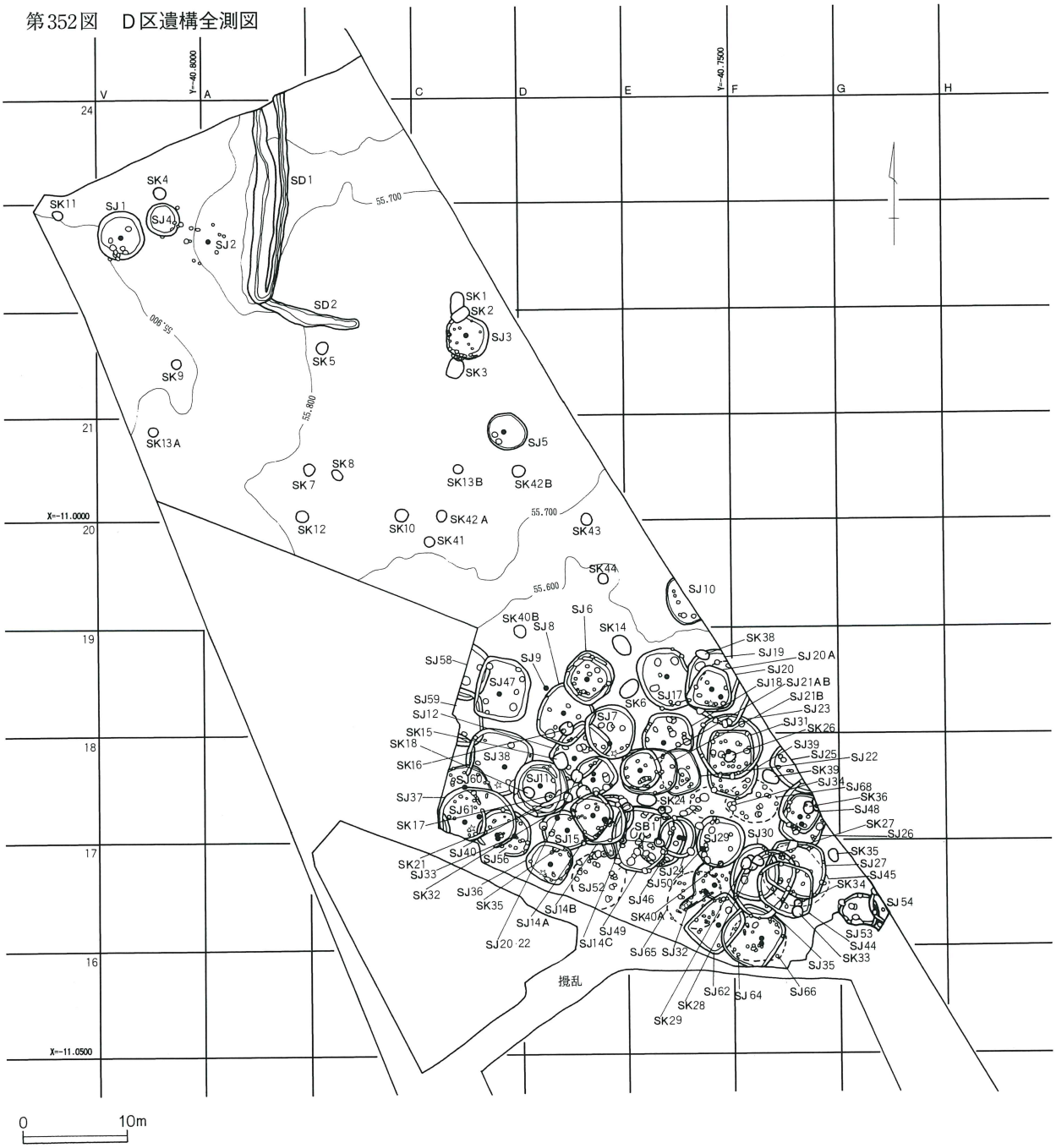
配石遺構は今回の発掘調査を通じてただ１基のみ検出された。独立した石造構造物としてこの名称を用いたが、周囲の遺構、とりわけ住居跡の出土状態を考慮するならば、本来住居構造の一部としてつくられたものである可能性も捨てきれない。

中期末葉の住居跡の覆土中に存在しているため、ほぼ同時期か、それ以降に構築されたものであろう。

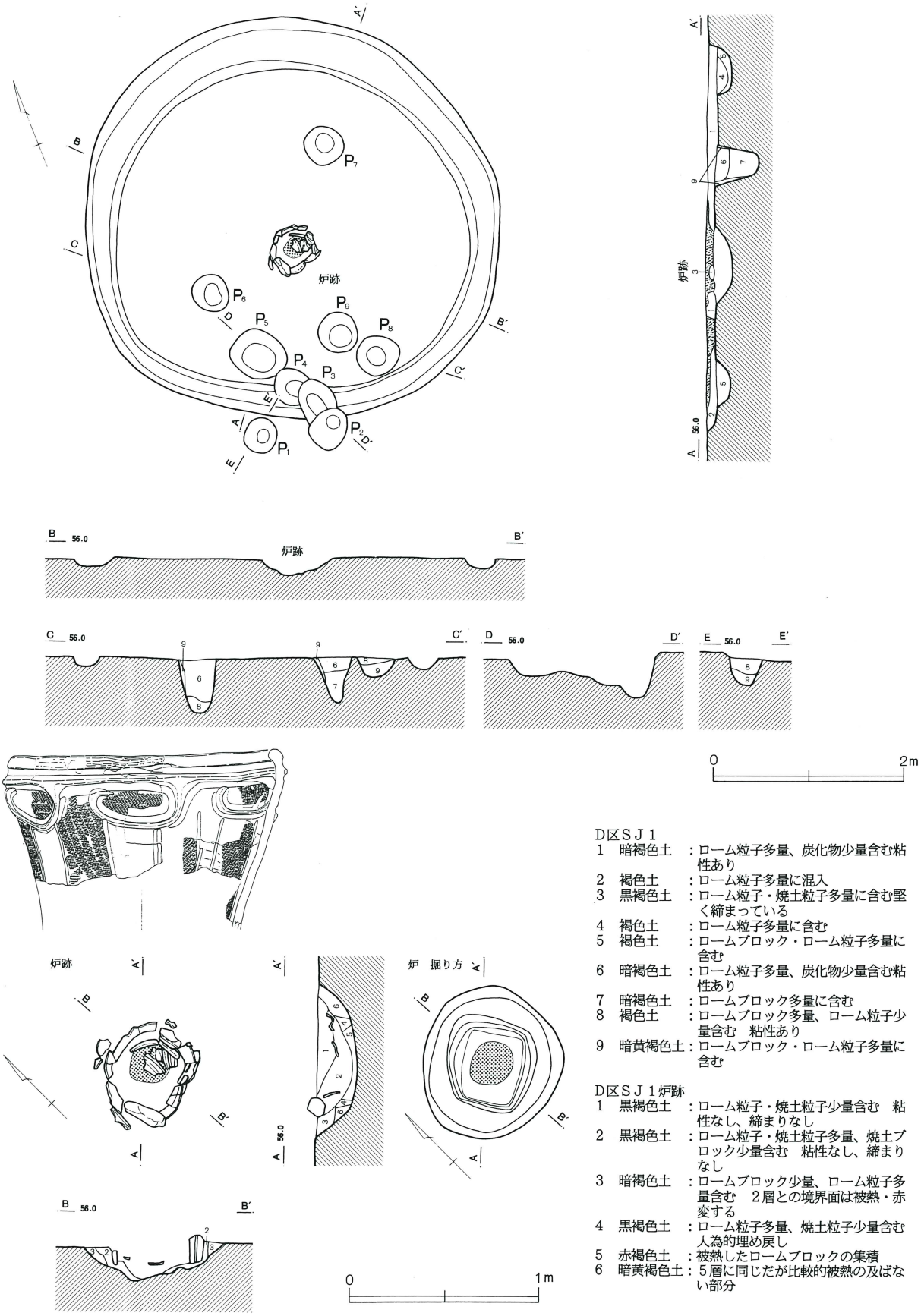
溝は調査区南端において２条が連続した状態で検出された。C区において検出された溝跡群からの連続としてとらえられるもので、所属時期や性格についてもC区の調査所見との関わりのうえで判断を下すべきものであろう。

溝および同時期の遺構は、調査区の南半部ではまったく検出されなかった。

第352図　D区遺構全測図



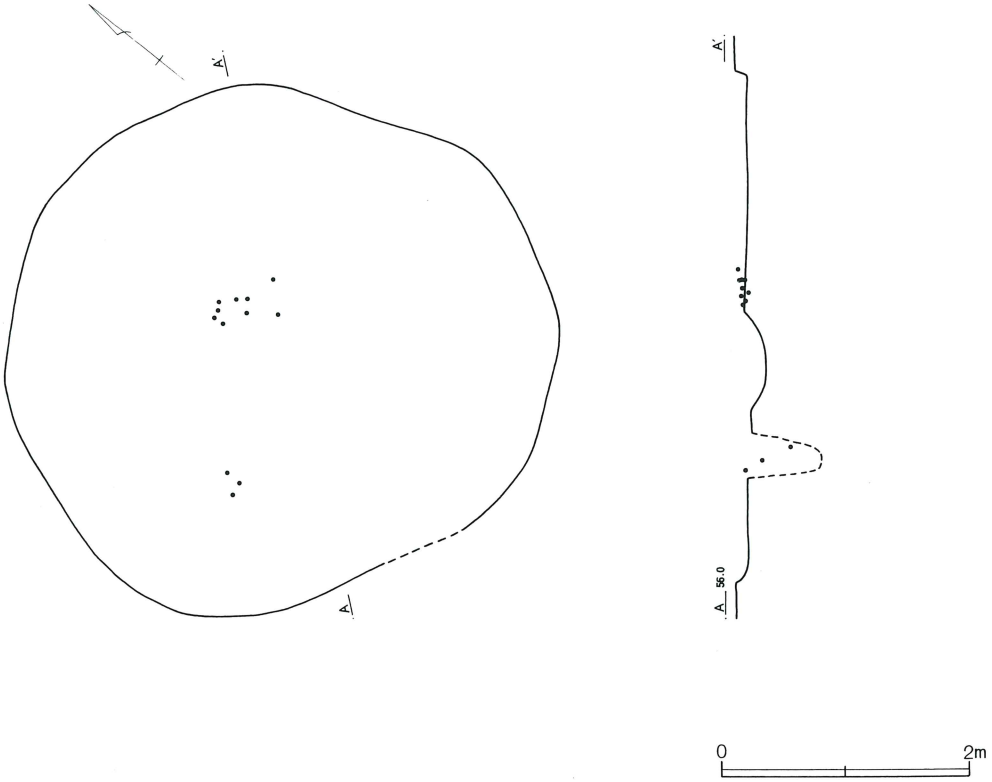
第353図　Ｄ区第１号住居跡



D区ＳＪ１
1　暗褐色土　：ローム粒子多量、炭化物少量含む粘性あり
2　褐色土　　：ローム粒子多量に混入
3　黒褐色土　：ローム粒子・焼土粒子多量に含む堅く締まっている
4　褐色土　　：ローム粒子多量に含む
5　褐色土　　：ロームブロック・ローム粒子多量に含む
6　暗褐色土　：ローム粒子多量、炭化物少量含む粘性あり
7　暗褐色土　：ロームブロック多量に含む
8　褐色土　　：ロームブロック多量、ローム粒子少量含む　粘性あり
9　暗黄褐色土：ロームブロック・ローム粒子多量に含む

D区ＳＪ１炉跡
1　黒褐色土　：ローム粒子・焼土粒子少量含む　粘性なし、締まりなし
2　黒褐色土　：ローム粒子・焼土粒子多量、焼土ブロック少量含む　粘性なし、締まりなし
3　暗褐色土　：ロームブロック少量、ローム粒子多量含む　２層との境界面は被熱・赤変する
4　黒褐色土　：ローム粒子多量、焼土粒子少量含む人為的埋め戻し
5　赤褐色土　：被熱したロームブロックの集積
6　暗黄褐色土：５層に同じだが比較的被熱の及ばない部分

第354図　D区第１号住居跡遺物分布図



2．発見された遺構と遺物

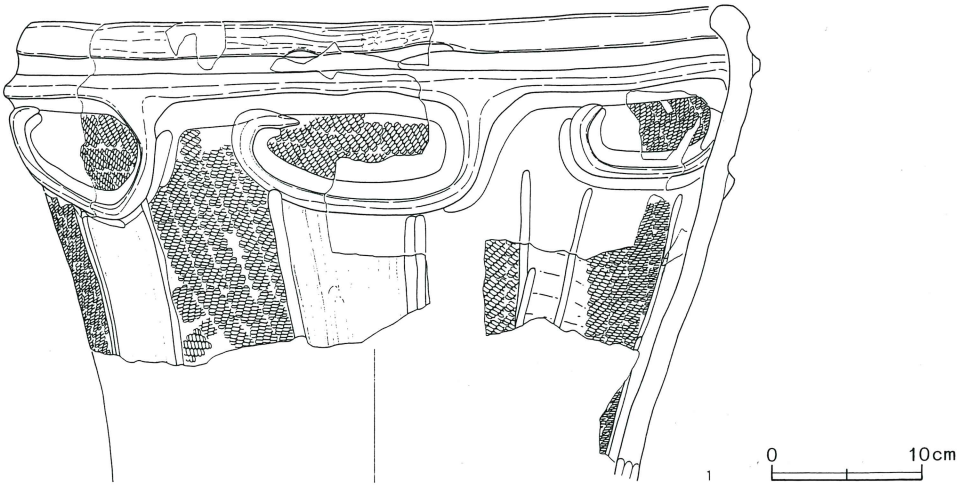
（１）住居跡

Ｄ区第１号住居跡（第353図～第356図）

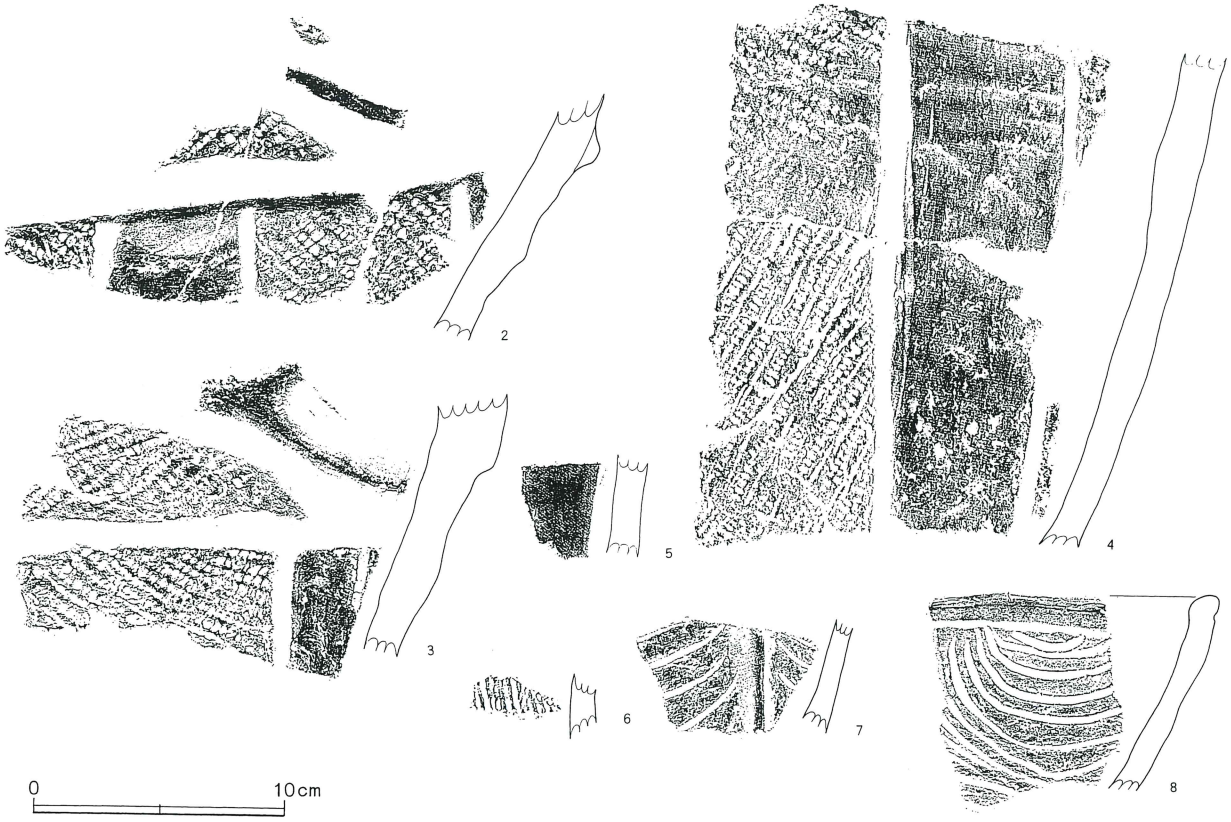
Ｖ－23区に所在する。南東－北西方向に長い楕円形の住居跡で、長径4.5ｍ、短径4.2ｍであるが、後述の柱穴配置等から主軸はこれに直交するＮ－23°－Ｅにあると考えられる。壁は残っていないが、壁溝は全周する。床面はほぼ平坦である。床面上および壁溝内外から９本のピットが検出され、Ｐ６・７・８が３本柱穴を構成するものと思われる。Ｐ１～Ｐ５は入り口部に伴う施設と考えられる。

炉跡は主軸線上やや入り口寄りの部分に位置している。破砕した深鉢の破片を用いた土器片囲炉であるが、

第355図　Ｄ区第１号住居跡出土土器（１）



第356図　D区第１号住居跡出土土器（２）



南西寄りの一辺だけは長楕円形の礫によって囲っている。土器囲部の長径50cm、短径45cm、炉床部までの深さは20cmを測る。

炉跡を中心に少量の遺物が出土している。主体をなすのは縄文時代中期末の土器片である。

出土土器（第355図・第356図）

１は炉体土器である。キャリパー類の大型深鉢で、口縁部から胴部中段にかけて残存する。口縁直下に１条の隆帯が巡り、ここから隆帯による扁平なＪ字モチーフが分岐して楕円形の区画を構成する。モチーフ下端から幅広の磨消し懸垂文が垂下する。地文はＲＬ単節の縄文である。

２・３はキャリパー類深鉢口縁部で、同一個体と思われるものである。口縁部に隆帯による渦巻モチーフが展開する。４は磨消し懸垂文の胴部で、拓影上半と下半では異なる原体による縄文が施文されている。６は撚糸文が施文される胴部で別時期のものと考えられる。７・８は曽利系の個体である。

Ｄ区第２号住居跡（第357図）

Ｖ・Ａ－23区に所在する。炉跡を中心に深さ15～40cm前後の比較的小規模なピットが環状に巡るもので、ピットの分布範囲は直径４ｍ前後である。

炉跡はピット群のほぼ中央に位置する。楕円形の地床炉で、長径70cm、短径50cm、深さ14cmを測る。彫り込みの北側に寄って顕著な焼土の堆積がみられた。

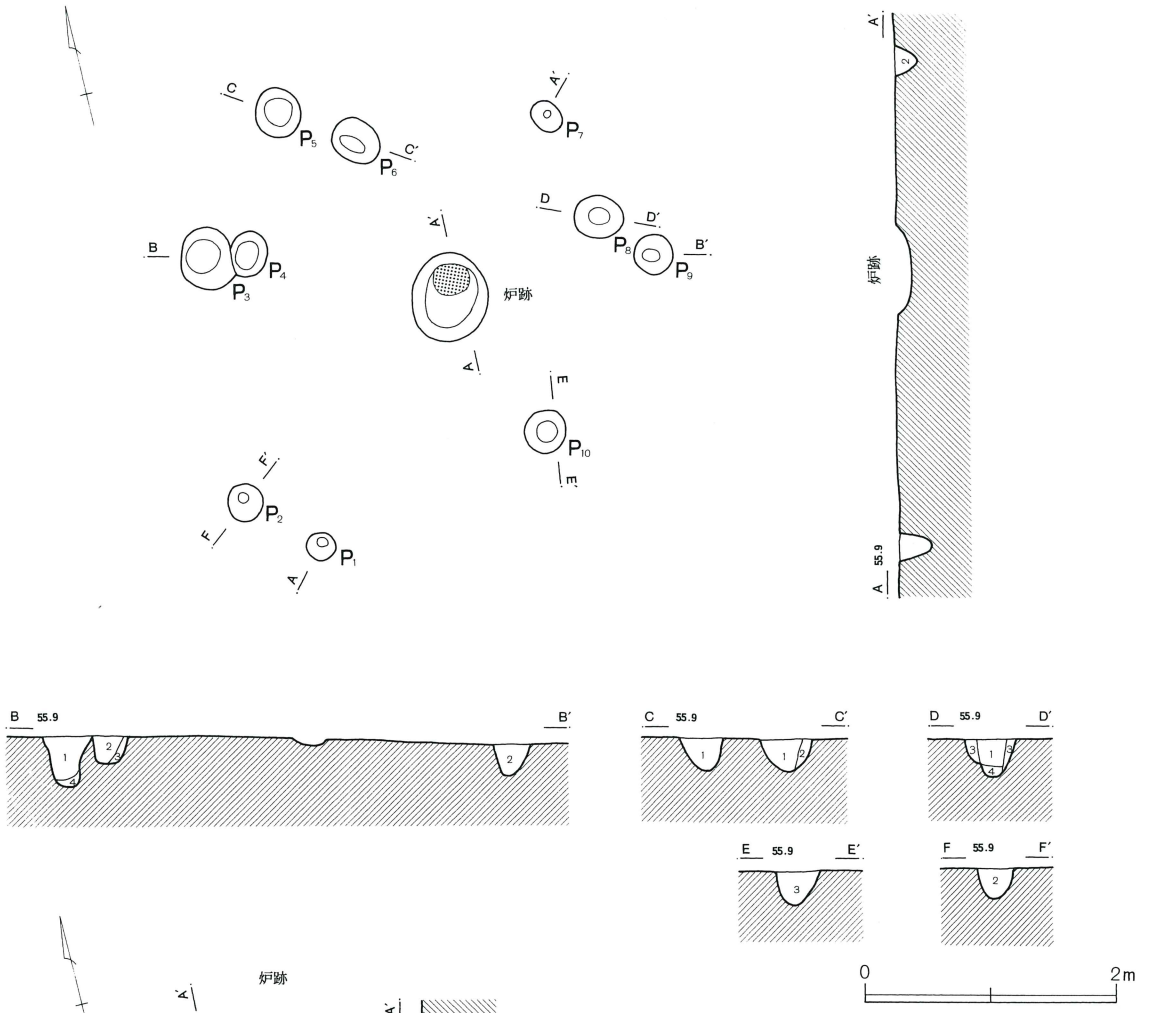
遺構検出面からごく少量の遺物が出土した。いずれも縄文土器小破片で、本住居跡に伴うものかは不明である。

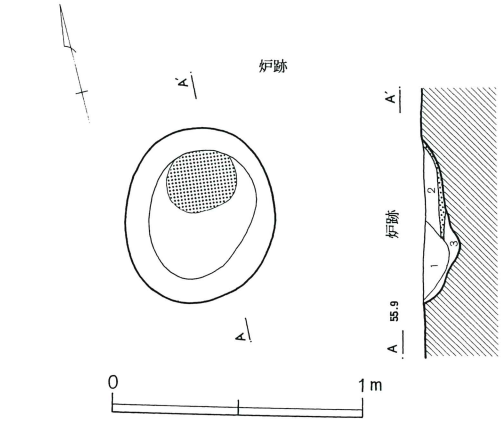
出土土器（第357図）

１は縄文時代早期の稲荷台式である。撚糸文の比較的浅い圧痕が間隔をおいて縦位回転で施文される。

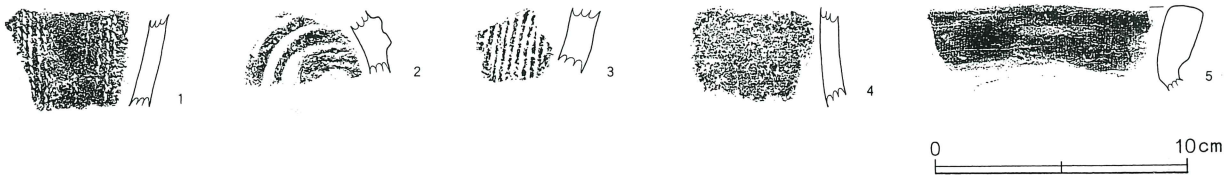
２はキャリパー類深鉢の口縁部文様帯である。二本隆帯によって入り組み・渦巻などの文様が描かれる。地文は横位の撚糸文である。３は撚糸文が施文される胴部である。４は両耳壷の口縁部と考えられる。５は浅鉢口縁部で、口唇が著しく肥厚して外屈する。

第357図　D区第２号住居跡

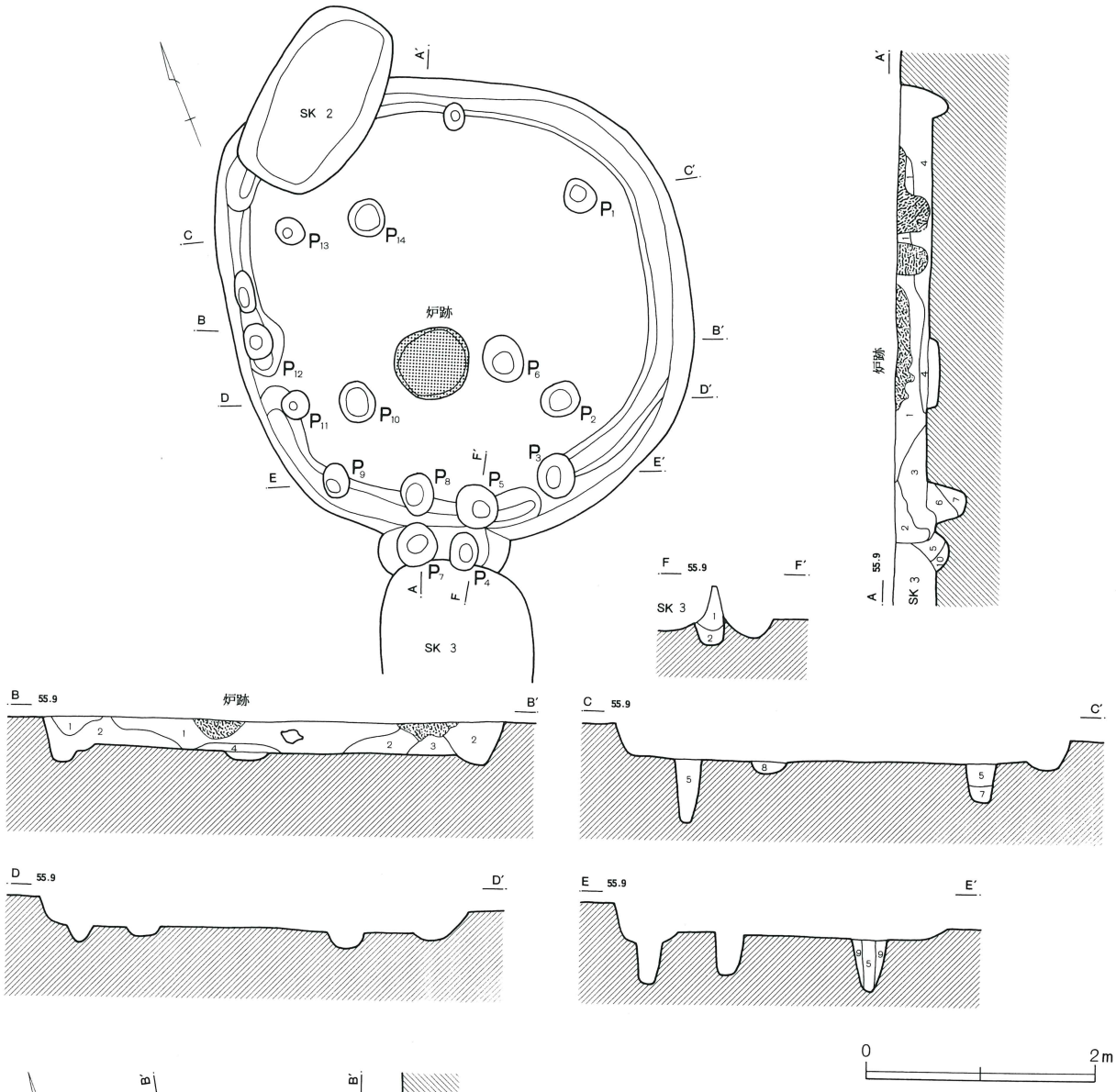


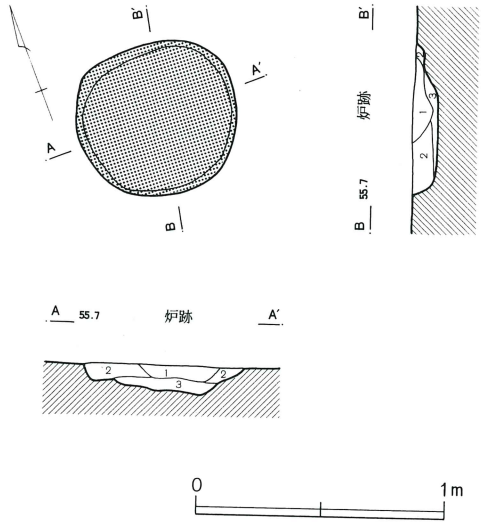


D区ＳＪ２
1　極暗褐色土：ロームブロック若干、ローム粒子やや多く含む　粘性あり、締まりあり
2　極暗褐色土：ロームブロック若干、ローム粒子少量含む　粘性あり、締まりあり
3　暗褐色土　：ロームブロック多く含む　粘性あり、締まり良し
4　暗黄褐色土：少量の黒色土混じる　人為的埋め戻し
D区ＳＪ２炉跡
1　黒褐色土　：ローム粒子、焼土粒子多量、焼土ブロック少量含む
2　黒褐色土　：ロームブロック少量、ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子多量に含む
3　黒褐色土　：被熱したロームブロックの集積



第358図　D区第３号住居跡

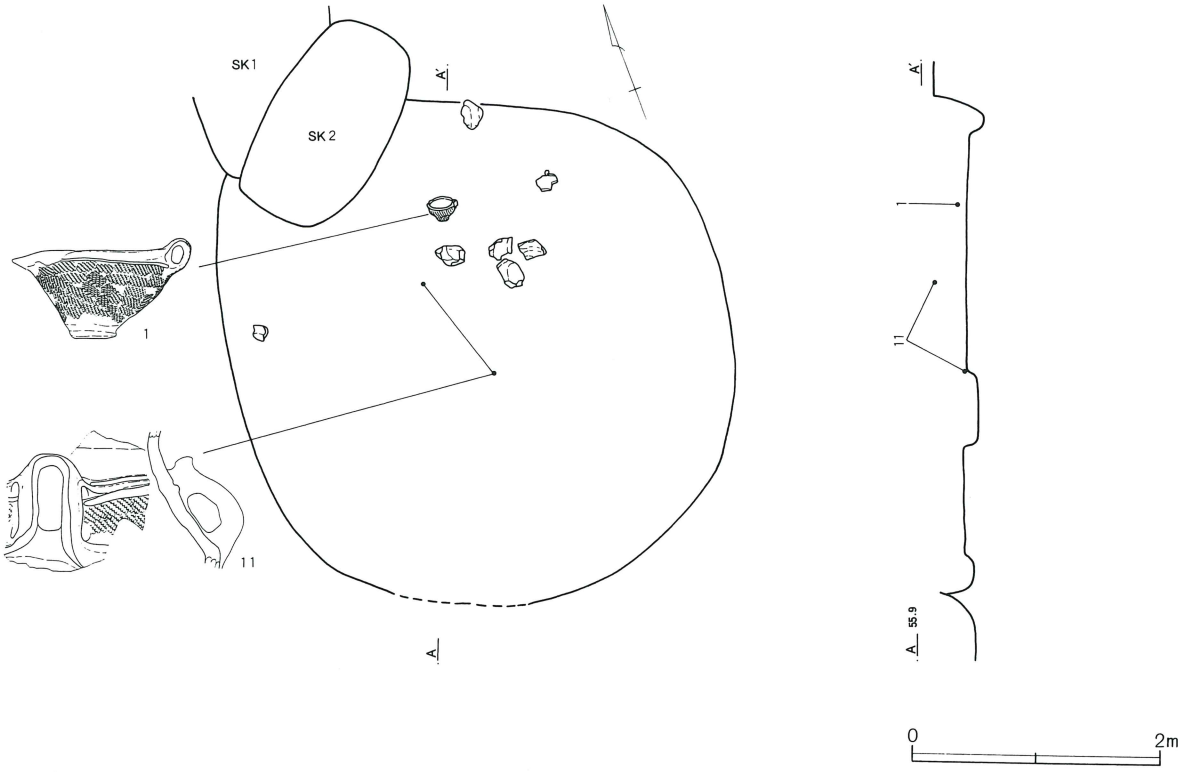




D区ＳＪ３
1　暗褐色土　：ロームブロック少量、焼土ブロック極少量含む　粘性あり、締まり良し
2　暗褐色土　：ロームブロック・ローム粒子若干含む　粘性あり、締まり良し
3　暗黄褐色土：ロームブロックやや多く、ローム粒子多く、焼土ブロック少量含む　粘性あり、締まり良し
4　暗褐色土　：ロームブロック若干、焼土ブロックやや多く含む
5　黒褐色土　：ローム粒子少量、炭化物微量含む　締まり弱
6　暗黄褐色土：ロームブロック含む
7　暗黄褐色土：ローム粒子多量に含む　締まりなし
8　暗黄褐色土：ロームブロック・ローム粒子多量に含む
9　暗黄褐色土：埋め戻しローム　締まりやや強
10　暗黄褐色土：ロームブロック少量、ローム粒子多量に含む　締まりやや強　人為的埋め戻しか

D区ＳＪ３炉跡
1　黒褐色土　：焼土粒子やや多く、炭化物微量含む　締まりやや強
2　黒褐色土　：ローム粒子やや多く含む　締まりやや強
3　赤黄褐色土：ロームブロック・焼土ブロックの集積

第359図　D区第３号住居跡遺物分布図



D区第３号住居跡（第358図～第361図）

C－22区に所在する。第１号土壙・第３号土壙に切られる。後述の小張り出しを除けば一辺４ｍの不整な隅丸方形ないし台形を呈する。主軸はN－23°－Eを指す。壁高は残りの良い部分で28cmを測る。壁溝は西壁と南壁の２カ所で途切れるほかは全周する。

床面はほぼ平坦で、南西方向に向かって若干下がっている。床面上および壁外から15本のピットが検出された。これらのうちP１・２・10・13が主柱穴で、４本柱を構成するものとみられる。

住居跡の南壁、第３号土壙と重複する部分で長さ25cm、幅110cmの小張り出し状の施設が存在する。この小張り出しと、これに接する壁溝上でそれぞれ１対づつ、合計４本のピットを検出した。これらは竪穴住居の入り口に伴う施設の痕跡であるものとみられる。ただし、この部分に埋甕が存在した形跡は認められなかった。

炉跡は主軸線上南壁＝入り口寄りに位置している。円形の地床炉で、直径65cm、深さ12cmを測る。

４本の主柱穴のうち手前２本が壁溝に掛かっている点や、柄鏡状にはならないまでも比較的大掛かりな入り口部の構造、炉の位置の偏りなどからみて、本住居跡は建物全体の構造が入り口部の所在する住居跡南壁に偏っている事実が指摘できる。

遺物は縄文時代後期初頭の土器が出土している。

出土土器（第360図・第361図）

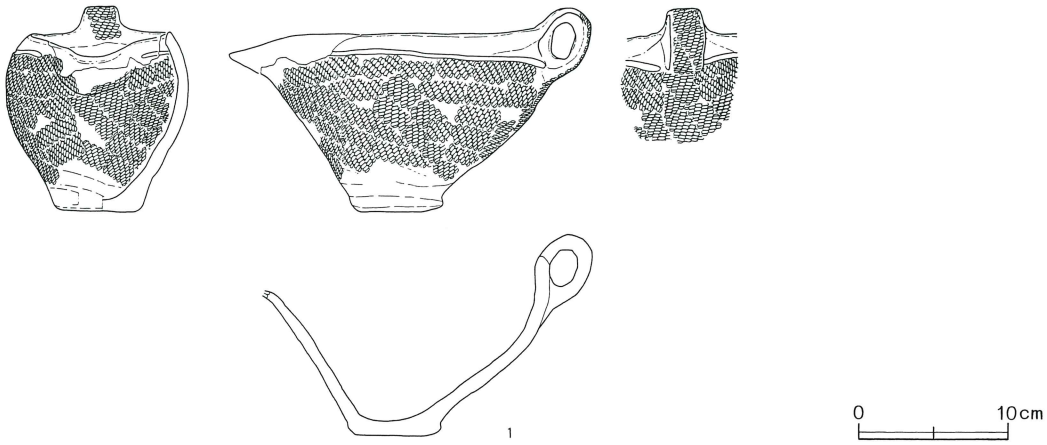
１は礫の集積付近で床面からわずかに浮いて出土した異形土器である。円形の底部から舟形の胴部、口縁部へとスムーズに連なるもので、成形の終わった土器を変形させたというよりは当初から上述の器形を目指したものといえる。

口縁の一端は片口状に張り出し、一端には環状の把手を付す。口縁下に１条の沈線が巡り、これより下にRL単節の縄文が施文される。

２は米粒状の列点が巡る深鉢胴部で、A区第５号住居跡２号炉体の胴部に類似の手法がみられる。

３～７は磨消し懸垂文の胴部である。８・９も同様の懸垂文だが、磨消し部の両側が微隆起線によって区

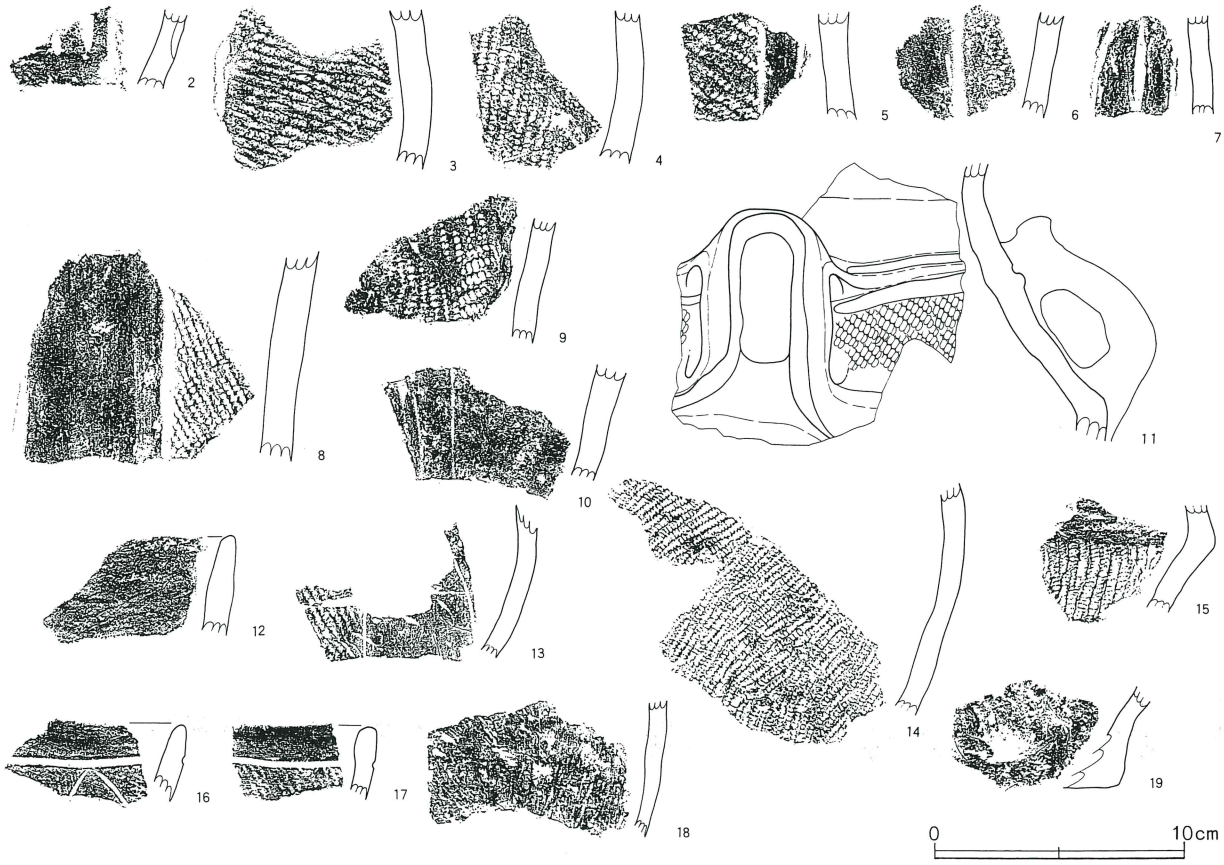
第360図　D区第３号住居跡出土土器（１）



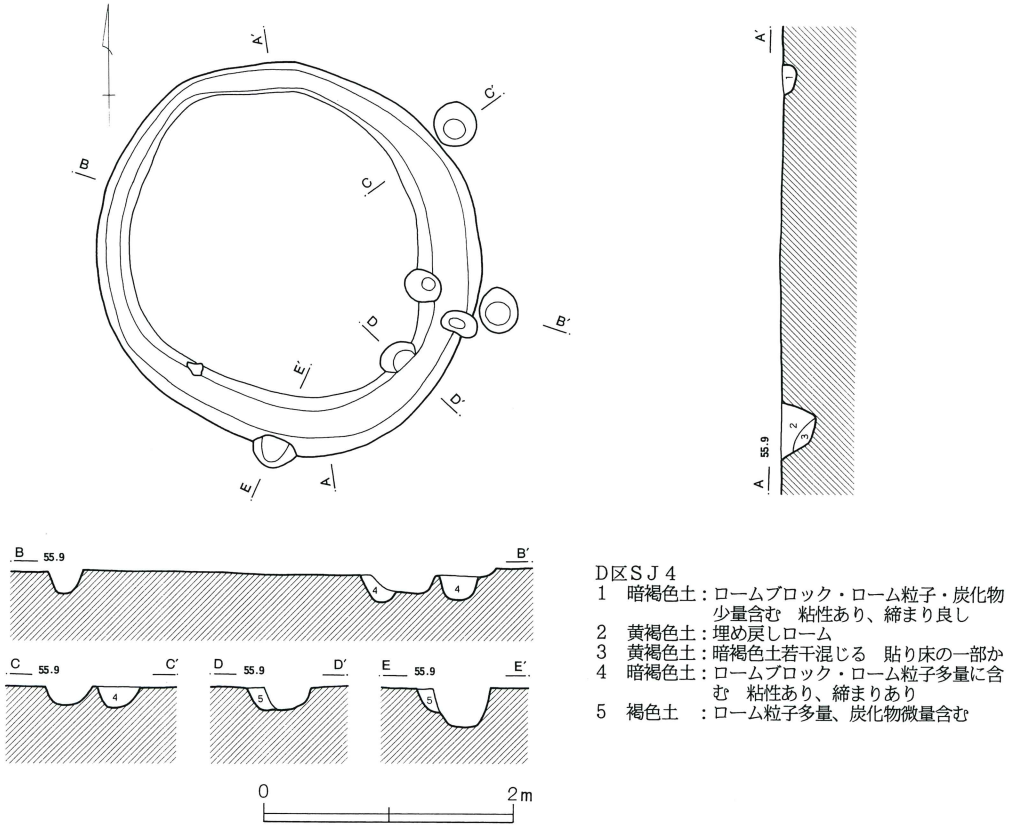
画される。10は細沈線のみによる懸垂文である。11は両耳壷の胴上半部で隆帯による区画が形成され、これに橋梁状の把手が付される。12は両耳壷の口縁部である。13は細沈線により鋸歯状の磨消し文様が描かれるもので、深鉢胴上半部か、両耳壷の胴下半部である可能性もある。14・15は縄文のみ施文される破片である。

16は深鉢口縁部で、10・13に類似の細沈線で文様が描かれる。口縁直下に１条の沈線が巡り、これより下に鋸歯状の磨消し文様が描かれる。17は口縁下に１条の沈線が巡る。18は無文の胴部で、縦位のなで調整がみられる。19は無文の底部である。

第361図　D区第３号住居跡出土土器（２）

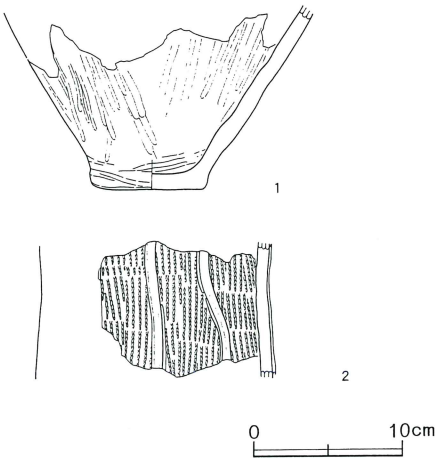


第362図　D区第４号住居跡



D区ＳＪ４
1　暗褐色土：ロームブロック・ローム粒子・炭化物少量含む　粘性あり、締まり良し
2　黄褐色土：埋め戻しローム
3　黄褐色土：暗褐色土若干混じる　貼り床の一部か
4　暗褐色土：ロームブロック・ローム粒子多量に含む　粘性あり、締まりあり
5　褐色土　：ローム粒子多量、炭化物微量含む

第363図　D区第４号住居跡出土土器



D区第４号住居跡（第362図・第363図）

Ｖ－23・24区に所在する。長径3.1ｍ、短径2.9ｍの楕円形の壁溝と、これにからむ数本の小ピットのみが検出された。床面の広い範囲をトレンチャーによる攪乱で破壊されている。壁は全く残存せず、柱穴・炉跡の類も検出できなかった。主軸方向は不明である。

ピットは６本検出され、壁溝の南西部分に集中する。規模はいずれも20～30cmである。壁溝の外に逸脱するものもあり、全てが本住居跡に伴うものであるかは確証がない。

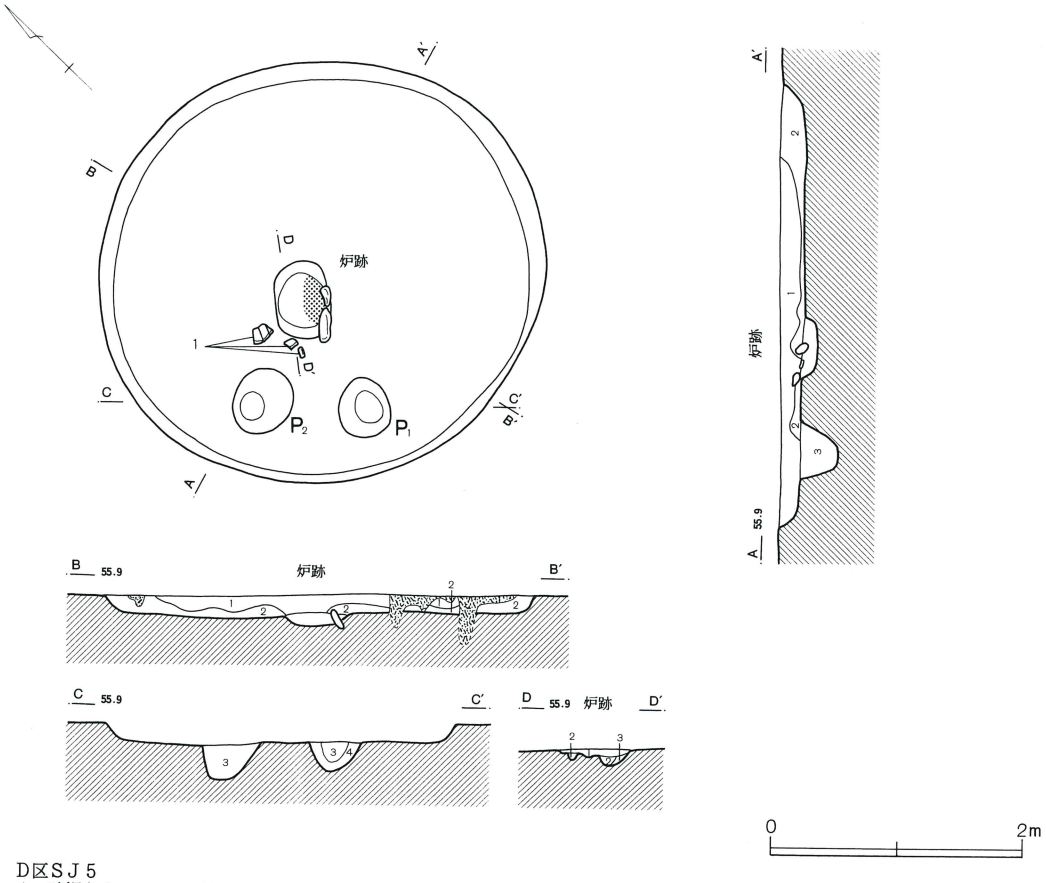
壁溝内部から出土した土器の特徴から、本住居跡の時期は縄文時代中期末葉と考えられる。

出土土器（第363図）

１は住居跡南西部の壁溝内から出土した深鉢で、胴下半部から底部にかけて残存する。全体に縦位の磨きが徹底され、底部周辺のみ横位の磨きが施される。縄文は施文されない。最大径24cm、現存高10.8cm、底径7.7cmを測る。

２は住居跡内の攪乱から出土したもので、１よりも明らかに時期が古く、周辺からの混入とみられる。キャリパー類深鉢の胴部中段で、緩やかなくびれがみられる。一本隆帯による懸垂文と蛇行懸垂文が交互に垂下し、両側に沈線によるなぞりが加えられる。地文は縦位の撚糸文である。

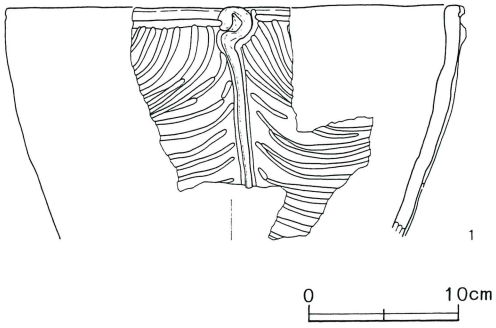
第364図　D区第５号住居跡



D区ＳＪ５
1　暗褐色土　：ローム粒子若干、炭化物少量含む　粘性あり、締まり良し
2　暗黄褐色土：ローム粒子多量に含む　粘性あり、締まり良し
3　暗黄褐色土：ローム風呂一句少量、ローム粒子若干含む　粘性あり、締まり良し
4　暗黄褐色土：ロームブロック極めて多く、ローム粒子多く含む　粘性あり、締まり良し

D区ＳＪ５炉跡
1　黒褐色土　：ローム粒子・焼土粒子多量に含む
2　黒褐色土　：ロームブロック・ローム粒子多量焼土粒子少量含む
3　褐色土　　：ローム粒子多量に含む

第365図　D区第５号住居跡出土土器



第５号住居跡（第364図・第365図）

Ｃ・Ｄ－21区に所在する。ほぼ円形の住居跡で、直径約3.5ｍを測る。壁高は残りの良い部分で20cmを測るが、立ち上がりは比較的鈍角である。壁溝は検出されなかった。床面はほぼ平坦で、北壁側で若干低くなっている。

炉跡は床面中央部南西寄りに位置している。長楕円形プランで、南側で部分的に石材を伴っている。本来長方形の石囲炉であった可能性もある。長径60cm、短径45cm、深さ12cmを測る。炉跡の主軸はＮ－45°－Ｅを指し、住居の主軸もこの方向に存在するものとみられる。炉床南東部の炉石に沿った部分で顕著な焼土の堆積が観察された。

炉跡南西寄りの部分で一対のピットを検出した。深さはＰ１が24cm、Ｐ２が28cmである。２本のピットは住居跡主軸線をはさんでほぼ対称に配されている。

出土土器（第365図）

1は炉跡南西部覆土下層で出土した。曽利系の深鉢で緩やかに内湾しつつ立ち上がる比較的単調な器形である。口縁直下に1条の沈線が巡り、これを横切って隆帯＋沈線によるわらび手状のモチーフが垂下する。左右には棒状工具による重弧文が描かれ、胴部にまで連続して施文される。口径30cm、現存高15.8cmを測る。

D区第6号住居跡（第366図～第373図）

D－19区に所在する。D区第8号住居跡を切っている。楕円形の住居跡で、長径4.08m、短径3.75mを測る。主軸方向はN－39°－Eを指す。

壁高は残りの良い部分でも12cm程度で、壁の立ち上がりも明確ではない。床面はほぼ平坦で、埋甕周辺で若干低くなっている。壁溝はほぼ2巡する。内周のものは切れ目なしに1巡するもので、埋甕1の掘り方に切られている。長径3.3m、短径3.1mで逆台形に近い隅丸方形を呈する。外周のものは本住居跡壁に沿って検出されたもので、東コーナーおよび北西壁部分で空隙が存在する。したがって本住居跡は少なくとも1度の建て替えを経験しているものと考えられる。

炉跡は床面ほぼ中央に存在する。楕円形の地床炉で、長径75cm、短径70cm、深さ13cmを測る。炉跡に重複は観察されなかった。

床面上からは13本のピットが検出された。内周の壁溝から一定の距離をおいて環状に巡るもので、新旧の上屋に伴うものが混在している。断面観察の結果P4・P7と、P1・2・5・9等は埋没の仕方が異なることはわかったが、それぞれの時期の柱穴配置を特定することは難しい。

炉跡の南西側、奥壁に向かって主軸線から右に外れた地点で、縦に並んだ2基の埋甕を検出した。これらのうち壁溝に接したものを埋甕1、炉跡寄りのものを埋甕2と仮称する。

埋甕1は前述のように内周の壁溝を切って埋設されており、新段階の住居跡に伴うものとみられる。

底部および口縁部を欠いた深鉢胴部中段を逆位に埋設したものであるが、土器の現存高のうち半分近くが床面上に露出している。掘り方は南北に長い長楕円形のピットで、土器のサイズに対し比較的余裕を持って設定されている。

埋甕2は埋甕1の北東部に接して、深鉢口縁部の破片が弧状に連なって出土したもので、撤去された埋甕の痕跡と判断した。その出土状態から判断するに逆位埋設の埋甕であったと考えられる。掘り方は南北に主軸をもつ長楕円形のピットで、埋甕1の掘り方に切られている。この埋甕は旧段階の住居跡に伴うもので、住居の建て替えに伴って破壊・撤去されたものと考えられる。

遺物はプラン中央部に集中して出土した。主体をなすのは縄文時代中期末葉の土器で、レベル的には大半が遺構検出面付近からの出土である。本住居跡と直接に関連づけられる遺物は先述の2基の埋甕のみといってよい。

出土土器（第368図～第373図）

1は埋甕1である。キャリパー類深鉢の胴部中段で、底部および頸部以上の部分を欠失している。このタイプの土器の特徴である胴部中段のくびれは観察されず、一本調子に開く寸胴の器形であると思われる。RL単節の縄文が縦位に施文され、やや幅狭の磨消し懸垂文が垂下する。最大径34.2cmを測る。

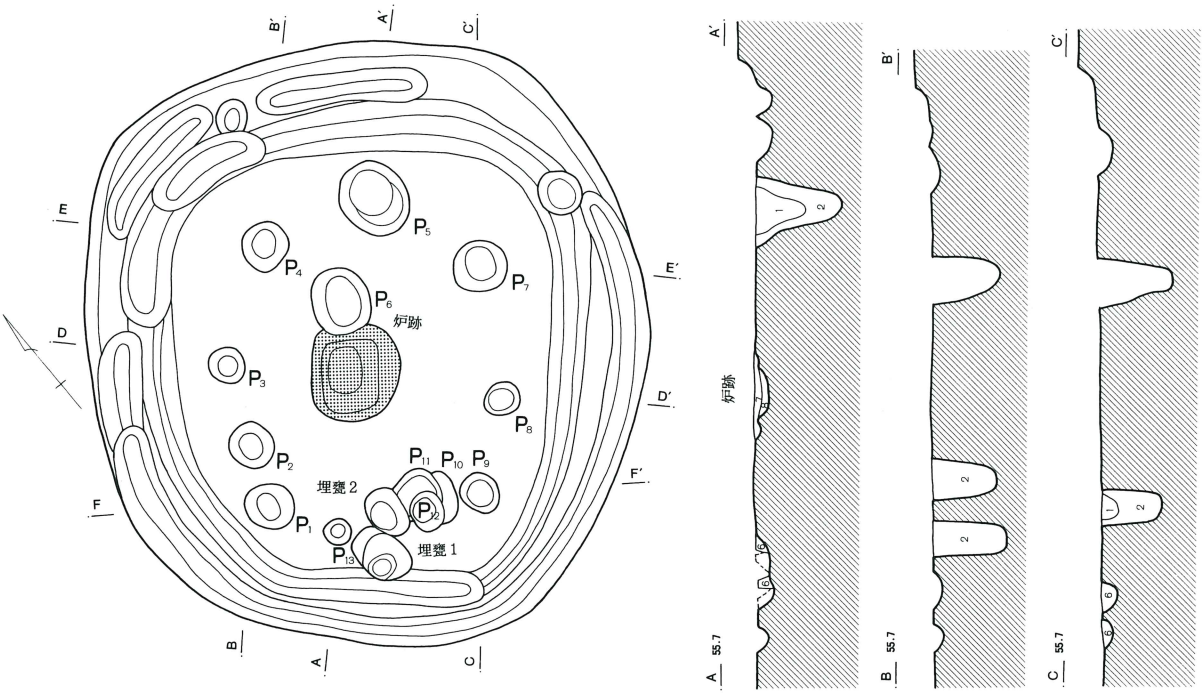
2は埋甕2である。吉井城山類の深鉢で、口縁のみ断片的に残存する。口端内削ぎ状で、内面に隆帯貼り付けによる稜をもつ。口縁直下に指頭による円形の刺突列が巡り、逆U字の磨消しモチーフが描かれる。地文はL無節の縄文である。

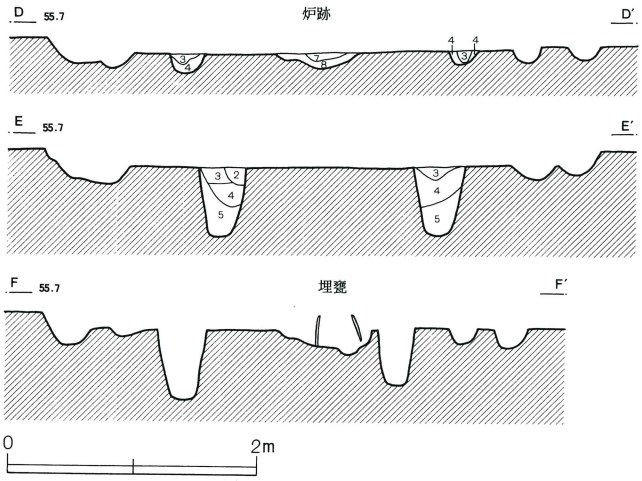
3はキャリパー類深鉢の口縁部である。隆沈線による渦巻文は形骸化して円文となり、隆帯上に指頭による1対の刺突が施される。

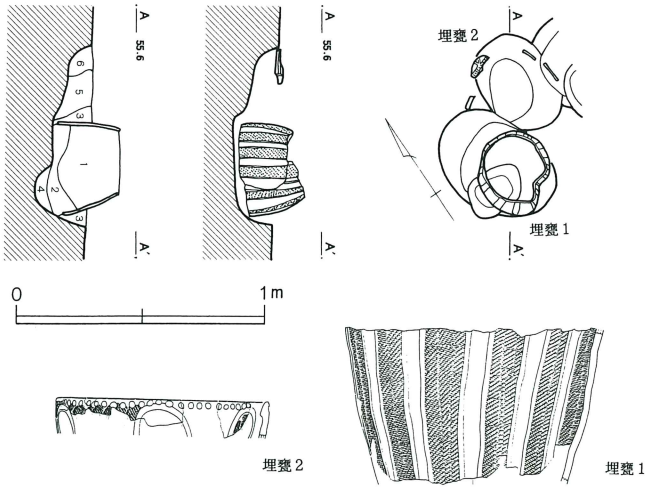
4もキャリパー類深鉢で、口縁および胴下半部を欠いている。口縁部文様帯下端は沈線および微隆起線によって区画され、3本一組の沈線による幅広の磨消し懸垂文が垂下する。地文はRL単節の縄文が縦位に施文される。最大径46.4cm、現存高23cmを測る。

5は深鉢胴下半部である。全面に磨消し懸垂文が垂

第366図　D区第6号住居跡





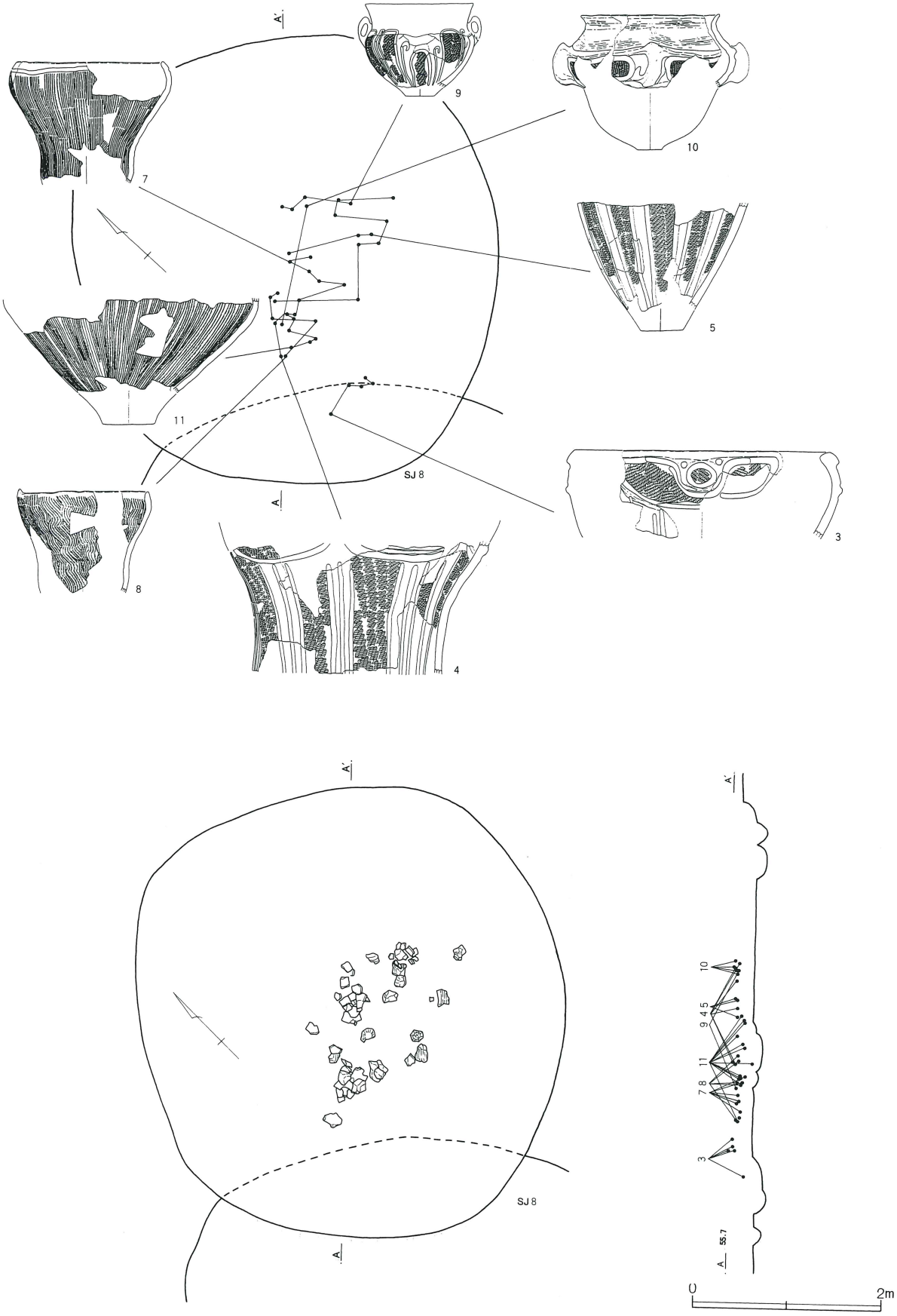


D区ＳＪ６
1　黒褐色土　：ロームブロック少量含む　粘性あり、締まり良し
2　暗黄褐色土：ロームブロックやや多く含む　粘性あり、締まり良し
3　暗黄褐色土：ロームブロック・ローム粒子多量に含む　粘性あり、締まり良し
4　暗褐色土　：ロームブロック若干、ローム粒子多く含む　粘性あり、堅く締まっている
5　暗黄褐色土：ロームブロック・ローム粒子多く含む
6　暗褐色土　：ロームブロック若干、ローム粒子やや多く含む　粘性あり、堅く締まっている　壁溝覆土

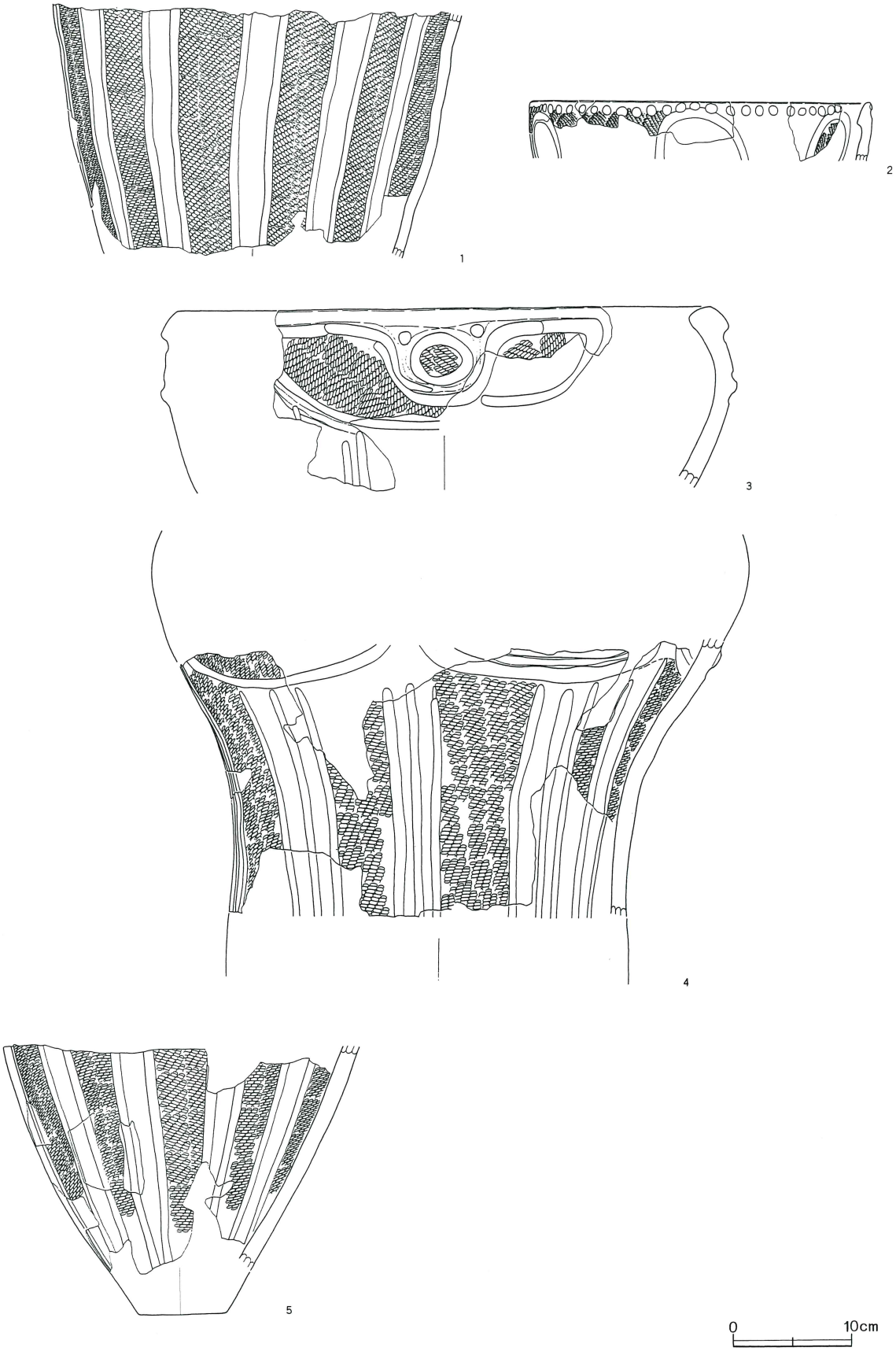
D区ＳＪ６炉跡
7　黒褐色土　：ロームブロック少量、焼土粒子・炭化物若干含む　粘性欠き、締まり良し
8　黒褐色土　：ロームブロック極少量、焼土粒子若干、炭化物少量含む　粘性欠き、締まり良し

D区ＳＪ６埋甕
1　暗褐色土　：ローム粒子やや多く、炭化物微量含む締まり強
2　暗褐色土　：ローム粒子多く、炭化物微量含む締まり強
3　暗褐色土　：ローム粒子・ローム粒子少量含む締まり強
4　黒褐色土　：ローム粒子少量、焼土・炭化物微量含む　締まり強
5　暗褐色土　：ローム粒子多量、炭化物微量含む締まり強
6　暗黄褐色土：ロームブロック少量、ローム粒子多量含む　締まり弱

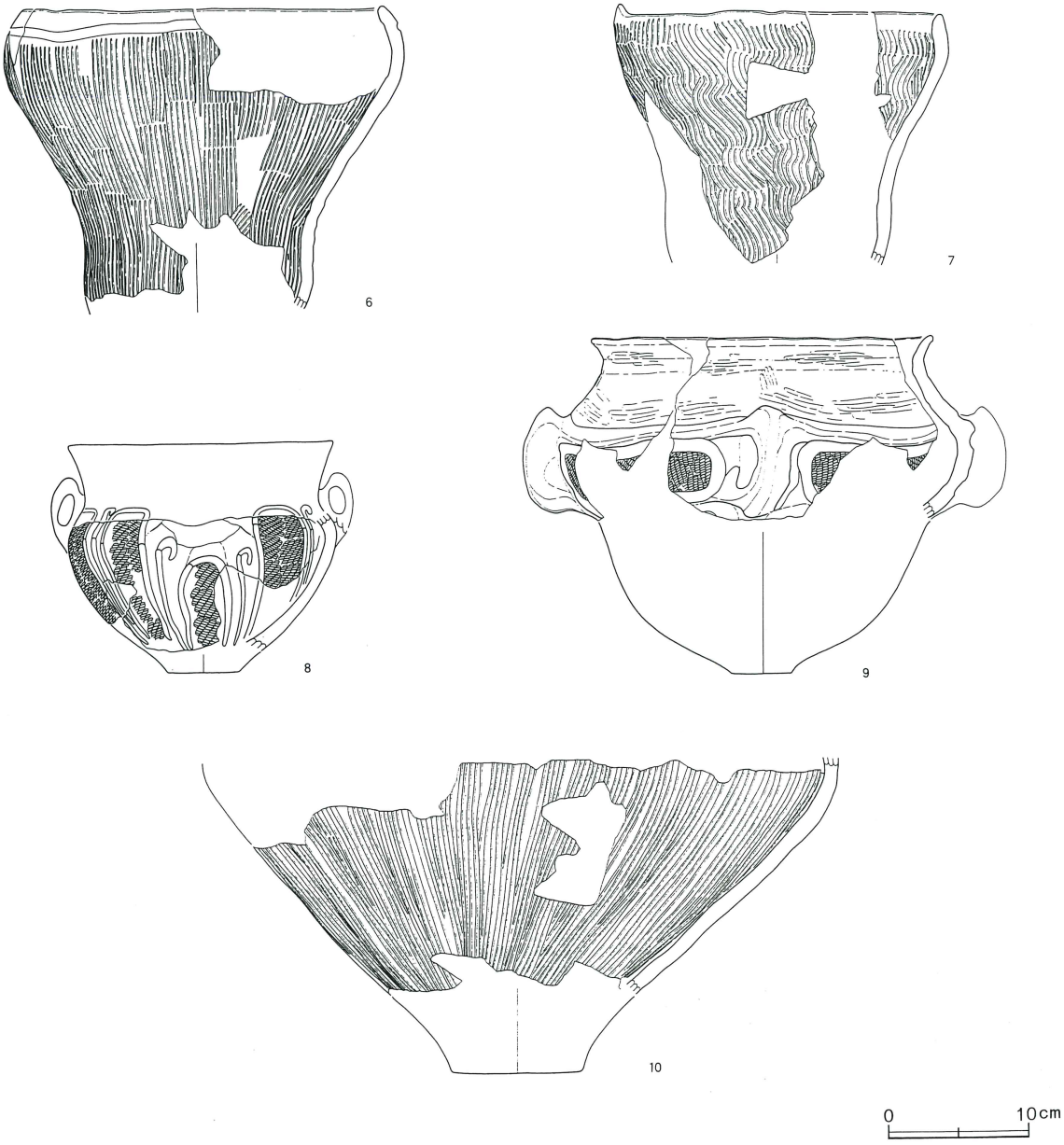
第367図　D区第6号住居跡遺物分布図



第368図　D区第6号住居跡出土土器（1）



第369図　Ｄ区第６号住居跡出土土器（２）



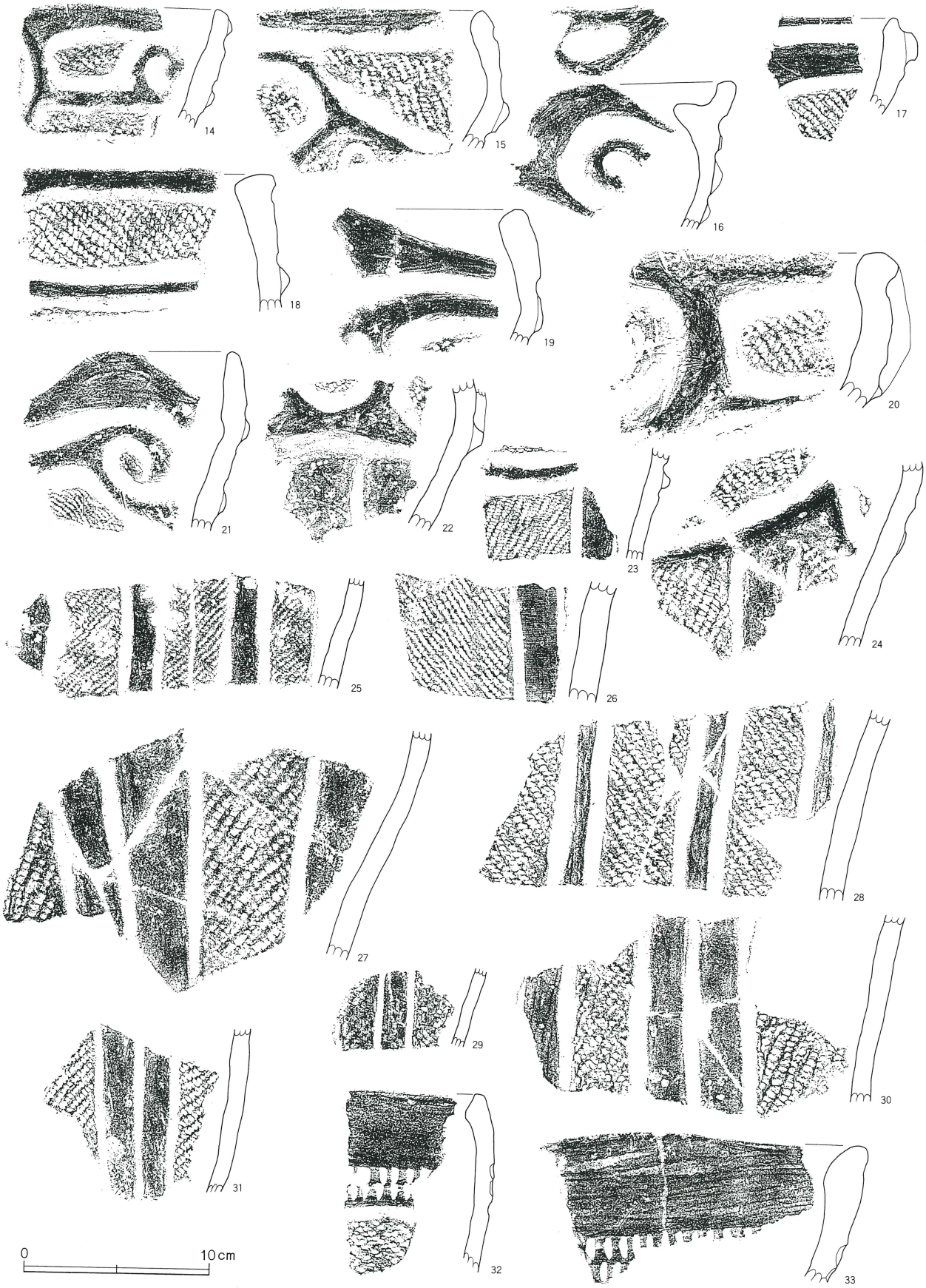
下する。地文はＲＬ単節の縄文が縦位に施文される。

６は半粗製的な深鉢で、胴下半部を欠失する。口縁下に１条の沈線が巡り、以下に櫛歯状工具による条線が施文される。現存高20.6cm、口径26.8cmを測る。７は同じ櫛歯状工具による条線が波状に施文される深鉢である。水平口縁で、１カ所のみ小突起が配される。現存高17.8cm、口径23.2cmを測る。

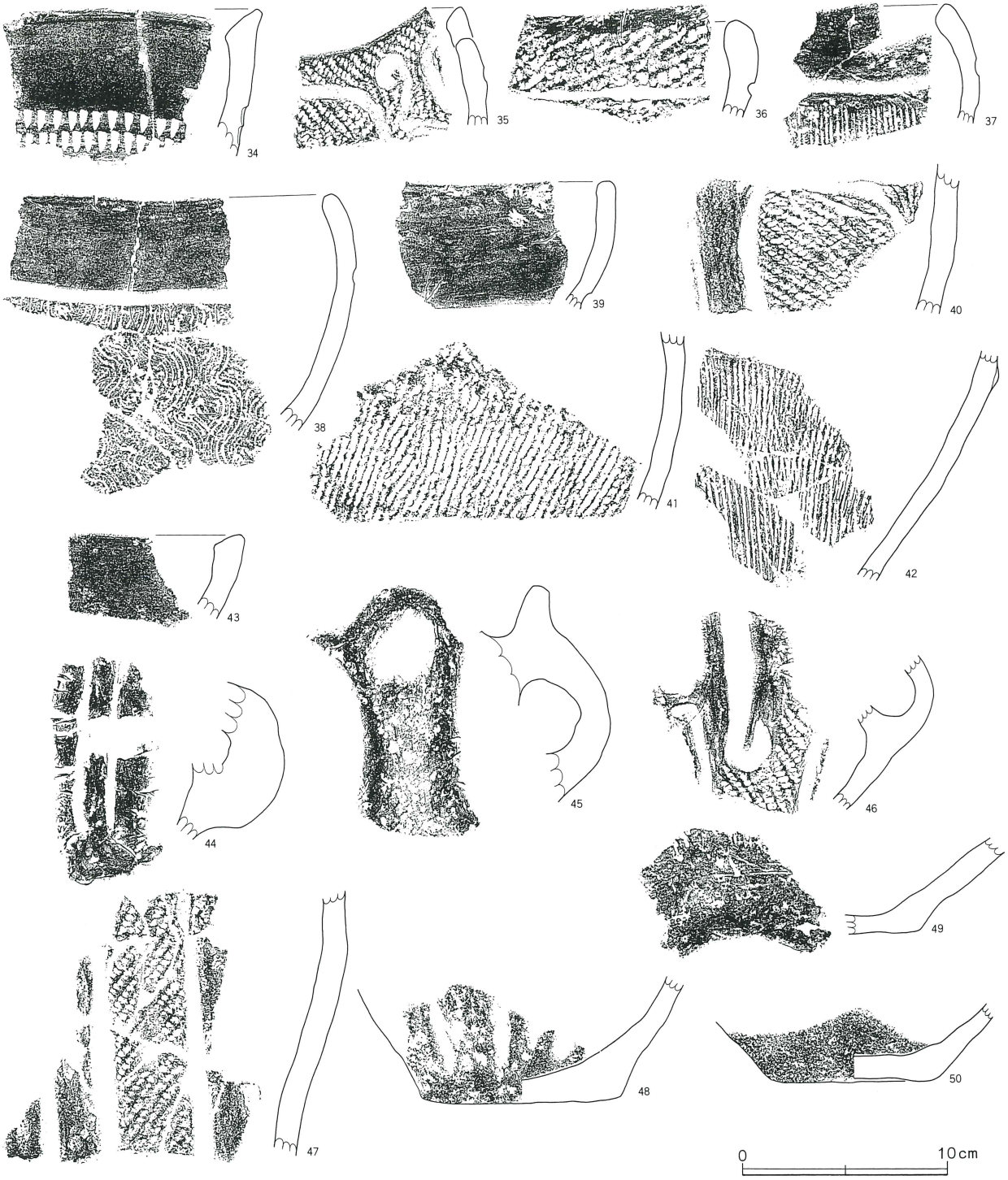
８は両耳壷である。頸部から上および底部を欠失する。全面に逆U字の磨消しモチーフが描かれ、間隙部分にわらび手状沈線が垂下する。最大径14cm、現存高9.8cmを測る。

９も両耳壷で、口縁から胴上半部にかけて残存する。口縁は無文で口縁直下でくの字に外屈し、胴上半部には隆帯による楕円形の横位の区画文が配される。把手はひれ状の大型突起へと変化し、本来の機能を失っている。区画から下はほとんど残存しないが、何らかの磨消しモチーフが描かれるものとみられる。突起部分を除いた最大径29.2cm、口径24cm、現存高18.3cmを測る。10は両耳壷胴下半部とみられるものである。底部から直線的に開いて、胴上半部で強く内屈する。地文

第370図　D区第6号住居跡出土土器（3）



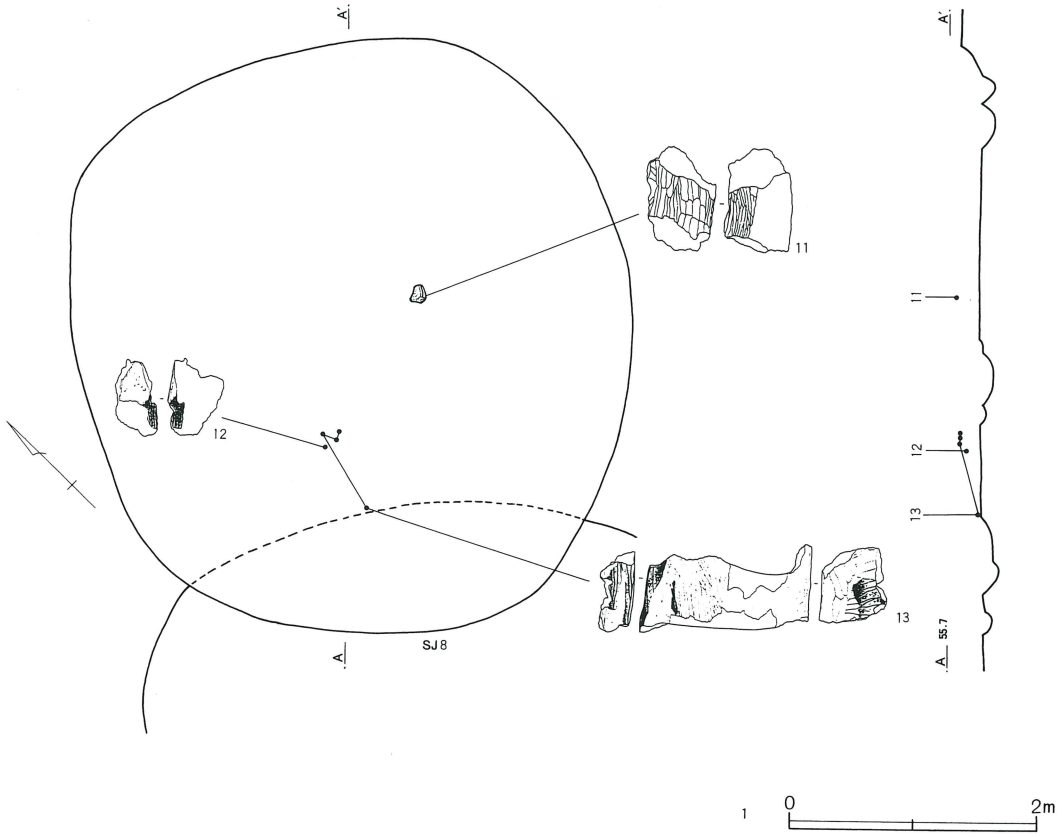
第371図　D区第6号住居跡出土土器（4）



は櫛歯状工具による条線が縦位に施文される。最大径45cm、現存高16.5cmを測る。

14～21はキャリパー類深鉢の口縁部である。15は口縁から頸部にかけての破片である。25～31は磨消し懸垂文の胴部である。隆帯＋沈線による楕円形の区画が比較的しっかりと存在しており、区画の接点に挿入される渦巻文は大振りのものと小振りのものが交互に配されるようだ。16は波状口縁で、内面に隆帯を貼りつけることで稜を形成し、この部分にわらび手状の沈線が描かれる。20は大振りの渦巻文が描かれる。22～24は口縁部文様帯か。32～34は複列のキャタピラ文が巡る口縁である。口唇は肥厚して断面内削ぎ状を呈し、

第372図　D区第6号住居跡遺物分布図（2）



口縁下に幅広の無文帯をはさんで前述のキャタピラ文が施文される。32は胴部に逆U字の磨消しモチーフが描かれる。35・36は地文縄文上に沈線文が描かれるものである。35は波状口縁で、地文縄文上に逆U字状の沈線区画とわらび手状の沈線が描かれる。36は水平口縁に沿って横位の沈線が巡る。37～39は浅鉢口縁部とみられるものである。口縁下に1条の沈線が巡り、胴部には櫛歯状工具による条線が施文される。38では波状の条線がみられる。

40は磨消し縄文によるH字のモチーフがみられる深鉢胴部である。41・42は浅鉢ないし両耳壷の胴部とみられる。41は縄文地文であるが、上下で異なる原体を用いた縄文が施文される。42は櫛歯状工具の条線を地文とする。

43は無文の口縁で、浅鉢か両耳壷に属するものと思われる。44～46は両耳壷の把手部分である。44は背面に縦位の平行沈線が描かれ、45は円形の窪みがみられる。46は背面にわらび手状の沈線が描かれるものである。48～50は底部破片である。48は深鉢、それ以外は浅鉢か両耳壷に属するものであろう。

大型土製品（第372図・第373図）

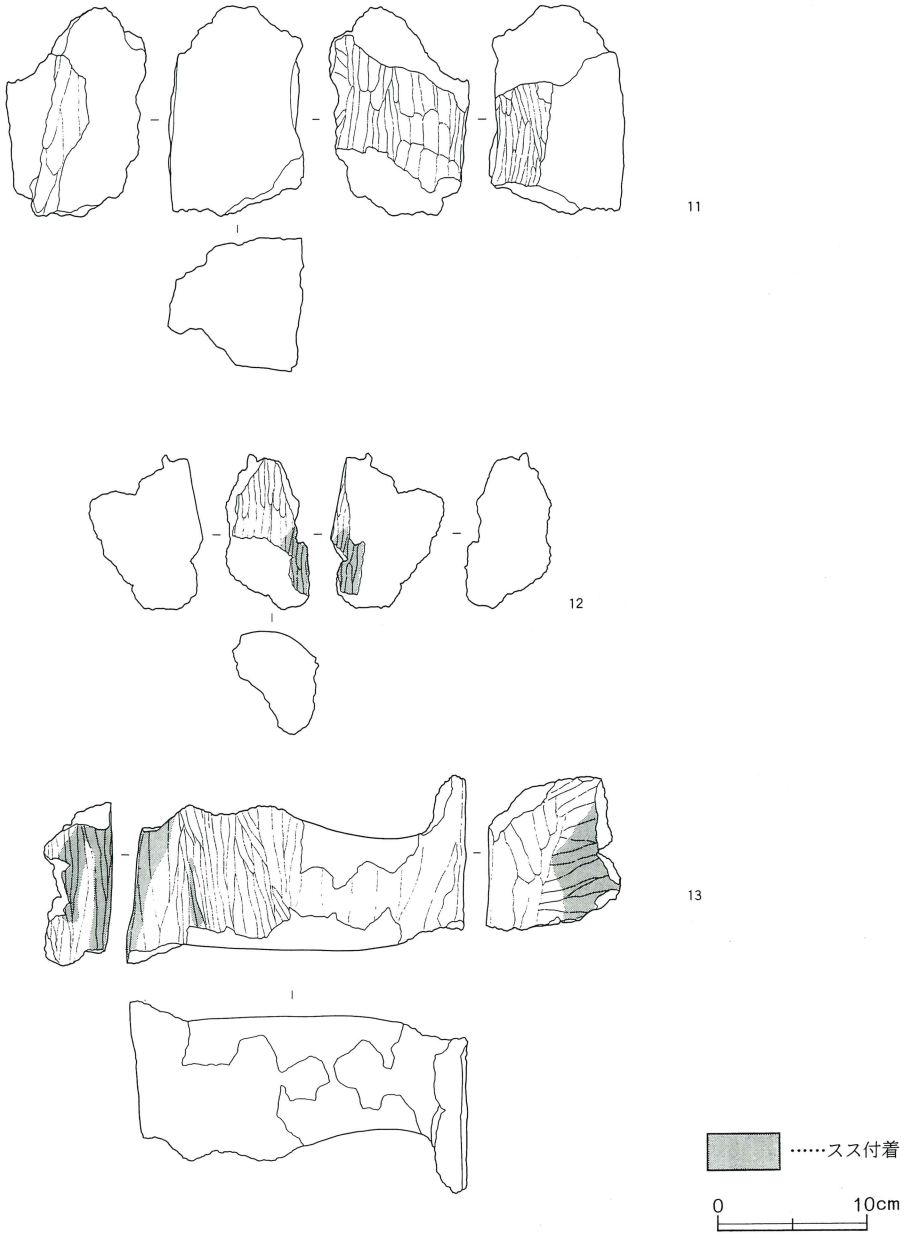
他の遺物とともに、本住居跡覆土中から用途不明の土製品の破片が出土した。その形状・厚みから土器の一部とは考えがたいものであり、ここでは大型土製品と仮称して報告する。

本住居跡からは3点の大型土製品が出土した。接合こそしなかったものの、胎土や焼成状態が似通っているため、同一個体である可能性が高いものである。

11は住居跡ほぼ中央から出土したもので、2側面を残している。表面の剥落が著しいため全容を推定することは困難だが、平らな底面をもった断面カマボコ形で、全体として一方向に湾曲した、ドーナツ状ないし腕のようなものが想定できるだろう。表面に二次焼成が観察される。

12は炉跡の上層で出土したもので、1面のみが残存している。基本的に11と同様の腕状のものの一部と推

第373図　D区第6号住居跡出土土器（5）

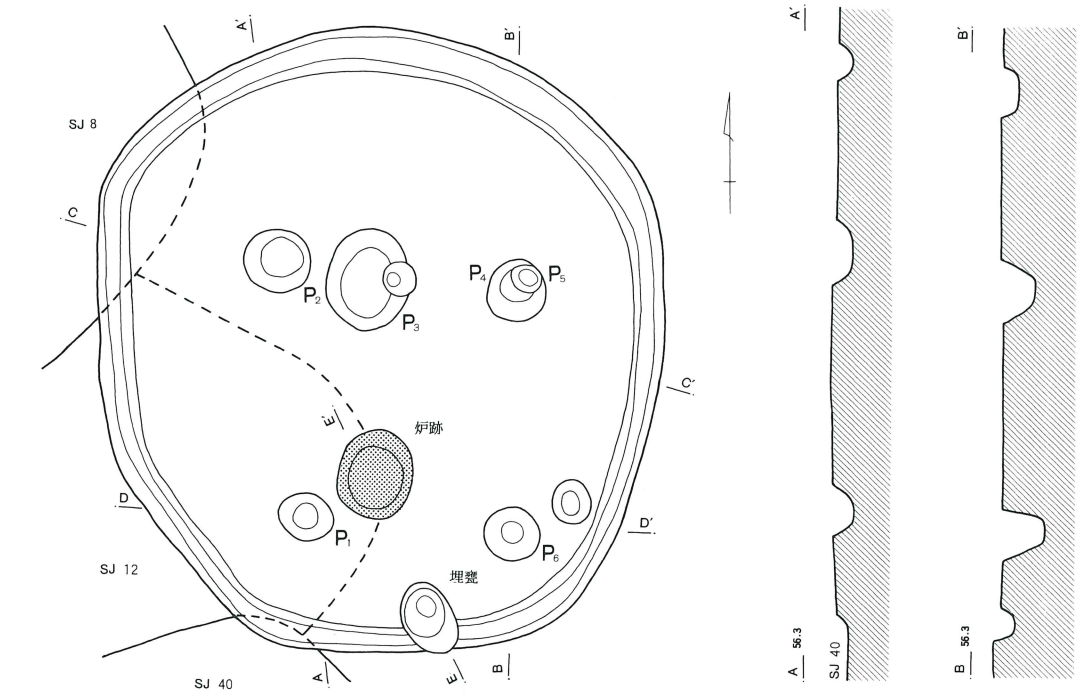


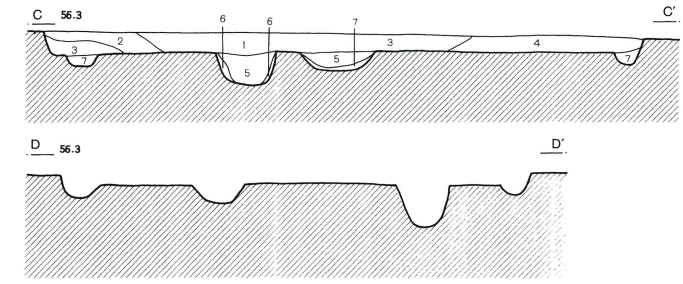
察される。部分的なススの付着が観察される。

13は12に近接して出土したもので、平坦な底面と思われる部分と、ここからほぼ直角に立ち上がる正対する2側面が残存している。前出の2者とは異なり、直方体の箱状の物体が想定される。側面にススの付着がみられる。

以上の大型土製品3点が同一個体に属するものであるならば、それは床面上に安定して置けるような、広くて平坦な底を持つもので、形状は上方よりも水平方向への広がりの勝った、「ひらべったい」ものである。さらにそれは、箱形の「胴体」と一定のカーブを描く「腕」から構成されている。今回出土した範囲においては表面には文様は施文されないものの研磨が徹底されており、なかなか丁寧に仕上げられている。ススの付着や二次焼成から、火の近くで使用されるものであったと考えられる。

第374図　D区第７号住居跡

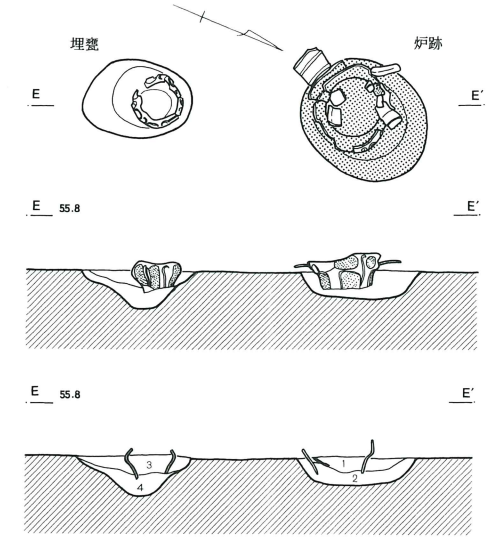


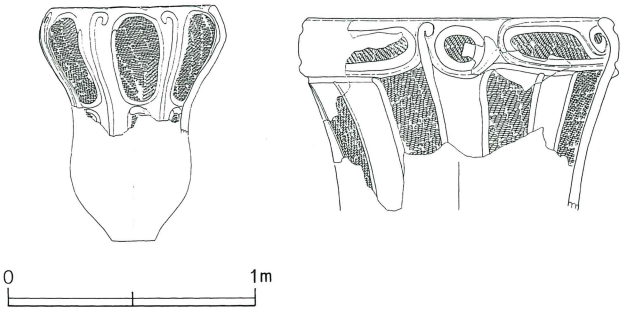


D区ＳＪ７
1　黒褐色土　：ロームブロック少量、焼土ブロック極少量、炭化物少量含む　粘性あり、締まり良し
2　黒褐色土　：ロームブロック・ローム粒子若干、焼土ブロック・炭化物少量含む　粘性あり、締まり良し
3　暗褐色土　：ロームブロック少量、ローム粒子若干含む　粘性あり、締まり良し
4　極暗褐色土：ロームブロック若干、ローム粒子少量、焼土ブロック極少量含む　粘性あり、締まり良し
5　極暗褐色土：ロームブロック多量、ローム粒子若干含む　粘性あり、締まりあり
6　暗黄褐色土：ロームブロック・ローム粒子多く含む　粘性あり、締まり良し
7　暗黄褐色土：ロームブロック・ローム粒子極めて多く含む　粘性あり、締まり良し

D区ＳＪ７炉跡
1　極暗褐色土：ロームブロック少量、焼土ブロック若干含む　粘性あり、締まりあり
2　暗黄褐色土：ロームブロック・焼土ブロック若干含む　粘性欠き、締まり良し

D区ＳＪ７埋甕
3　極暗褐色土：ロームブロック少量含む　粘性あり、締まり良し
4　極暗褐色土：ロームブロック若干、焼土ブロック少量、炭化物やや多く含む　粘性に富み、非常に堅く締まっている





Ｄ区第７号住居跡（第374図～第377図）

Ｄ－18・19区、Ｅ－18・19区に所在する。第８・12・40号の各住居跡を切っている。楕円形の住居跡で、長径５ｍ、短径4.5ｍ、主軸はほぼ真北を指す。

壁溝は残りの良い部分で16cmを測る。床面はほぼ平坦である。

壁溝はほぼ全周し、重複はみられない。床面上から６本のピットが検出された。これらのうちＰ１・２・４（５）・６が４本柱穴を構成するものと思われる。深さは17～30cmで、主柱穴としては比較的浅い。これらに比べＰ３は掘り込みがはっきりせず、床面の汚れに近いものである。

炉跡は主軸線上、南1/3程の地点に位置している。深鉢の口縁から胴上半部を正位で埋設した埋甕炉である。炉の掘り込みは炉体土器より一回り大きく、長径50cm、短径44cm、深さ10cmを測る。

炉跡の南東約１ｍを隔てて、壁溝に一部掛かった状態で埋甕が検出された。胴下半部を欠いた深鉢を正位で埋設したものである。下面に長径43cm、短径32cm、深さ17cmの長楕円形の掘り方を伴っている。土器はこの掘り方の底面から８cmあまり浮いた状態で設置されていた。

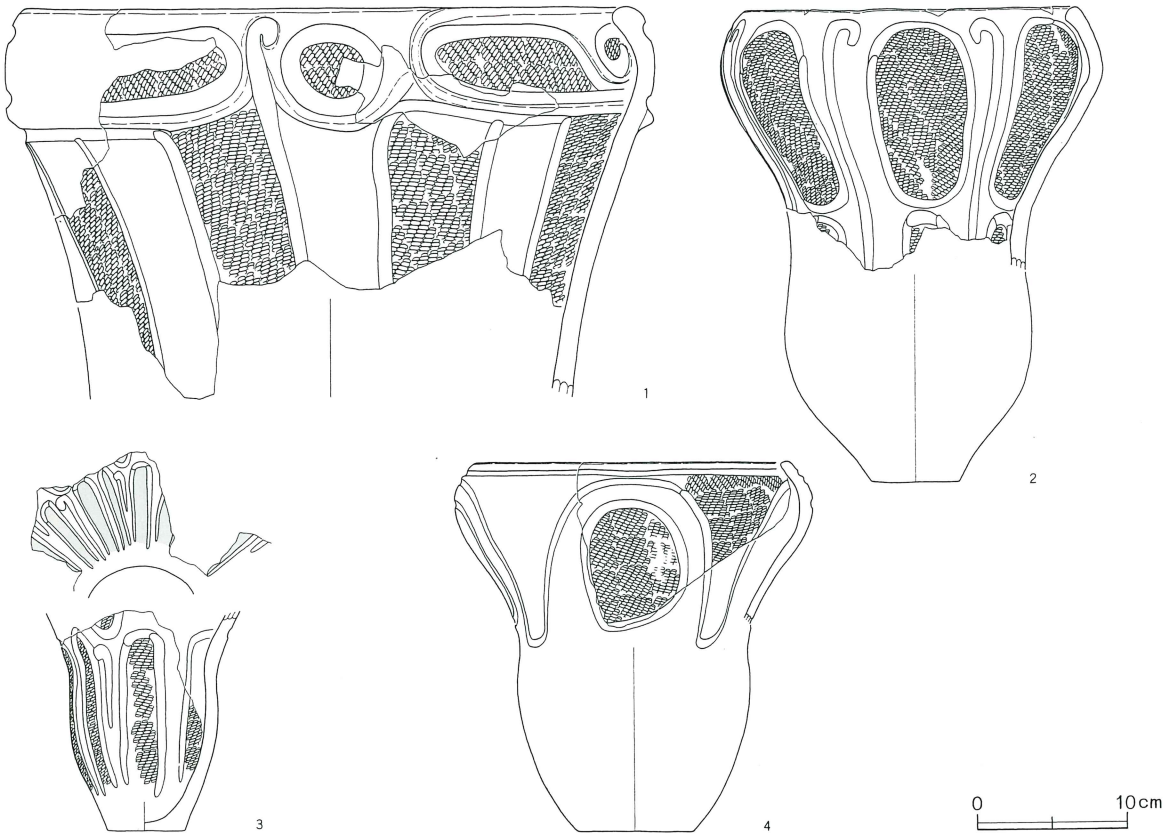
遺物は縄文時代中期末葉の土器が出土している。

出土土器（第375図～第377図）

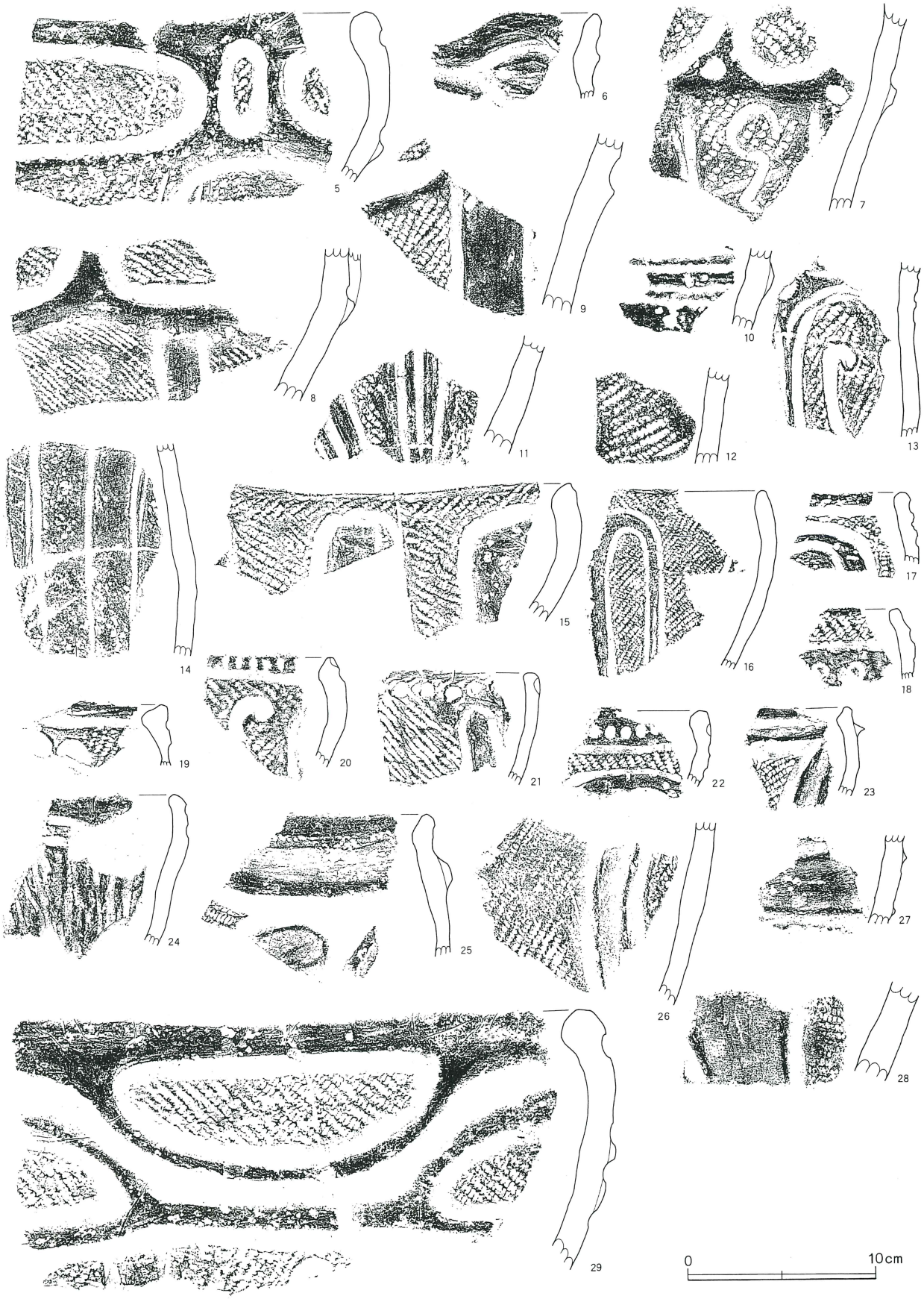
１は炉体土器である。キャリパー類の深鉢で、胴部中段から下を欠失する。口縁部文様帯は入り組み状の渦巻文が一部で円形の区画に変化する。胴部との境は隆帯によって分離されるが、この区画を横切って胴部からわらび手状の沈線が貫入する。胴部には磨消し懸垂文が垂下する。本資料は伝統的な口縁部文様帯を強く意識しつつも、胴部文様との融合が進みつつある中期末葉段階のキャリパー類の土器として位置づけることができるだろう。地文はＲＬ単節の縄文である。口径43cm、現存高25.4cmを測る。

２は埋甕である。胴部中段から下を欠失する。胴部中段のくびれ部分で文様帯が上下に分帯され、胴上半

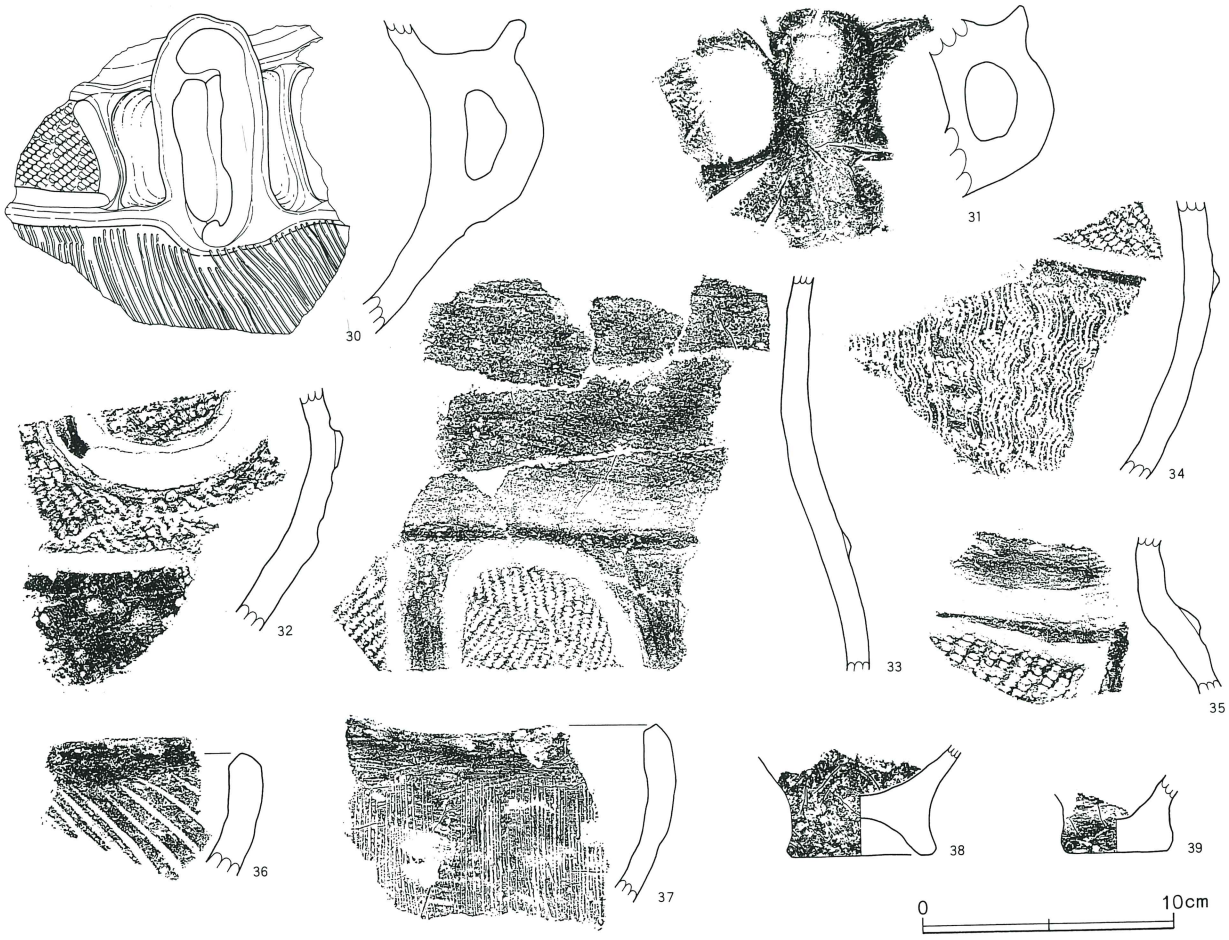
第375図　Ｄ区第７号住居跡出土土器（１）



第376図　D区第７号住居跡出土土器（２）



第377図　Ｄ区第７号住居跡出土土器（３）



部には楕円形、胴下半部には逆U字の磨消し文様が描かれる。無文部には対向するわらび手状の沈線が垂下する。地文はＲＬ単節の縄文である。口径22cm、現存高17.2cmを測る。

３は深鉢で、胴部中段から底部にかけて残存する。胴部のくびれを境に文様帯が上下に分帯され、胴上半部には楕円形、胴下半部では逆U字の磨消し文様が互いに交差して配置される。モチーフの間隙にはわらび手状の沈線が描かれる。地文はＲＬ単節の縄文である。底径５cm、現存高9.6cmを測る。

４は深鉢胴上半部である。口縁直下に１条の沈線が巡り、胴上半部には玉抱き文が描かれる。地文はＲＬ単節の縄文である。

５・６・29はキャリパー類の口縁部である。５は水平口縁で渦巻文は楕円形の区画へと変化する。６は小波状口縁で、波頂部を起点として入り組み状の渦巻文が描かれる。29は渦巻文が省略され大波状の区画となっている。

７～10は口縁部文様帯の下端を区画する隆帯＋沈線である。頸部無文帯は存在せず、胴部には磨消し懸垂文が垂下する。７は口縁部文様帯を構成する隆帯の交点に指頭による円形の刺突が施される。また、懸垂文間の縄文部にわらび手状の沈線が垂下する。11・12は磨消し懸垂文の胴部破片である。13は逆U字状の区画内部に縄文が施文され、わらび手状の沈線が描かれる。無文部には指頭による円形刺突が施される。14は沈線による懸垂文で、ごく浅い縄文がみられる。

15～22は沈線による磨消しモチーフが施文される口縁部で、吉井城山類に属するものである。15は波状の区画と口縁の間に縄文が施文され、区画内部の縄文が磨消される。16は縦長の玉抱きモチーフが描かれる。17は口縁直下に１条の沈線が巡り、胴部には逆U字の

磨消しモチーフが描かれる。18は口縁直下に１条の沈線が巡り、この沈線から上に縄文が施文される。また、沈線の下に沿って竹管状工具による円形刺突が施される。19は口唇外面に隆帯が貼りつけられ、直下に１条の沈線が巡る。胴部にはわらび手状沈線が垂下する。

20～21は口縁直下に刻みや刺突列が巡るものである。

23・25～28は微隆起線による磨消しモチーフが描かれる。

24は口縁直下に２条の平行沈線が巡り、胴部には箆状工具を用いた、ごく荒いなでもしくは削り調整が徹底される。

30～35は両耳壷である。30・31は橋梁状の把手部分で、背面にわらび手状の沈線が描き込まれる。32は同上半部の文様帯で、地文縄文上に隆帯による渦巻文が描かれる。33は逆U字状の磨消しモチーフが描かれる。肩部でほとんど段をもたない「なで肩」の器形で、本資料については橋梁把手をもたないかも知れない。その場合、D区第36号住居跡から類似の復元個体が出土している。34は胴下半部に波状の条線が垂下する。一方で胴上半部の文様帯における地文はＲＬ単節の縄文である。

35は胴上半部の文様帯と無文の頸部を隔てる隆帯区画で、隆帯による渦巻文の一部がみられる。

36は箆状工具による斜位の集合沈線が施文される深鉢口縁部である。37は縦位の条線のみの深鉢口縁部である。

38は貧弱な脚台が付される深鉢底部で、台付きと言うよりは上げ底に近いイメージである。39は無文の深鉢底部である。

Ｄ区第８号住居跡（第378図～第382図）

Ｄ－18・19区に所在する。第６・７号住居跡に切られ、第９号住居跡を切っている。第12号住居跡・第16号土壙とも重複するが、新旧関係は不明である。北東に向かって開く隅丸台形の住居跡である。長径5.5ｍ、短径4.9ｍを測る。主軸方向はＮ－30°－Ｅを指す。壁高は残りの良い部分でも14cm程度である。

壁溝は全周し、重複はみられない。床面はほぼ平坦である。

炉跡は主軸線上やや南寄りに位置している。埋甕炉であったものとみられるが2/3近くをピットに切られて失っている。炉体土器は胴下半部を欠失する深鉢を正位に埋設したものであったと思われる。

炉体土器の周囲に検出された掘り方は直径60cmの円形で、深さ35cmを測る。土器は掘り方底面から10cmあまり浮いた状態で埋設されている。

床面上から８本のピットが検出された。うち１本は炉跡を切るもので、本住居跡とは直接には関係のないものであると考えられる。残る７本のうち主軸線南端の壁際で検出されたＰ１を除く６本は炉跡を中心として直径３ｍほどの環状に並んでおり、これらが本住居跡の柱穴であると考えられる。ピットの深さは28～54cmを測る。Ｐ１は炉跡を切るピットと規模が似通っており、これと組んで別個の遺構を構成する可能性がある。

遺物は主として住居跡中央の遺構検出面付近から出土している。東壁付近からも第380図２・６・８・９などが出土しているが、これらはむしろ第６号住居跡に属するものである可能性が強い。

覆土中からは縄文時代中期末葉の土器片が出土している。炉体土器の時期からみても、本住居跡の時期は縄文時代中期末葉と考えられる。

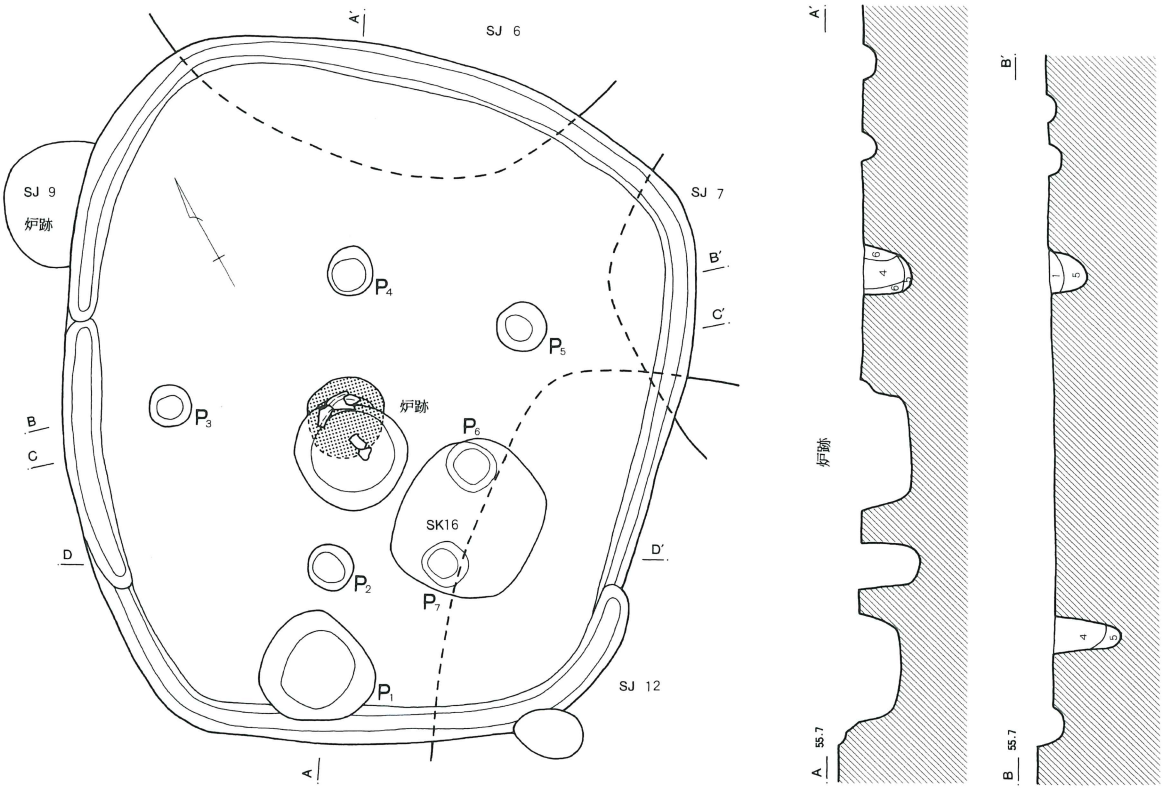
出土土器（第380図～第382図）

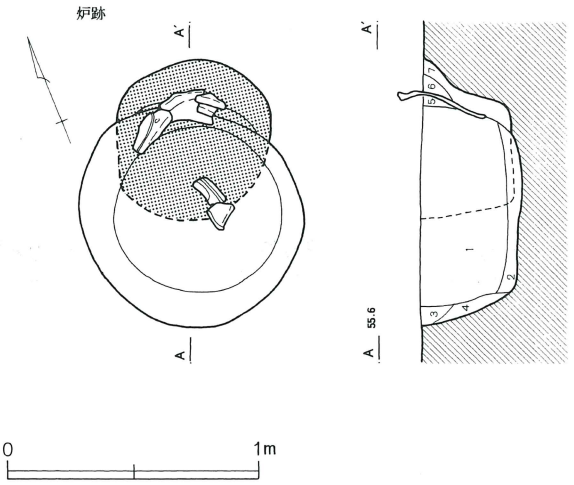
１は炉体土器である。キャリパー類深鉢で、口縁部から胴部中段にかけて、全周の1/4あまりが残存する。水平口縁で、口縁部には入り組み状の渦巻モチーフが展開する。胴部には三本沈線の磨消し懸垂文が垂下する。地文はＲＬ単節の縄文である。口径推定46cm、現存高33.8cmを測る。

２は深鉢で、口縁から胴部中段にかけて残存する。胴部中段に緩いくびれを持ち、口縁は内湾する。全面に櫛歯状工具による縦位の条線だけが施文される。口径推定25cm、現存高19.4cmを測る。

３は椀形の浅鉢である。口唇は肥厚し、内面に稜を

第378図　D区第８号住居跡





D区ＳＪ８

1　極暗褐色土：ロームブロック若干、ローム粒子・焼土ブロック少量、炭化物若干含む　粘性あり、締まり良し

2　暗黄褐色土：ロームブロック・ローム粒子極めて多く、焼土ブロック少量、炭化物極少量含む　粘性あり、締まり良し

3　暗黄褐色土：ロームブロック・ローム粒子極めて多く含む　粘性あり、締まり良し

4　黒褐色土　：ローム粒子多量、炭化物微量含む　粘性なし、締まりなし

5　黒褐色土　：ロームブロック・ローム粒子多量に含む　粘性あり、締まりなし

6　褐色土　　：ロームブロック・ローム粒子多量に含む

D区ＳＪ８炉跡

1　極暗褐色土：ロームブロック・焼土ブロック・炭化物若干含む　粘性あり、堅く締まっている

2　極暗褐色土：ロームブロックやや多く、焼土ブロック少量含む　粘性あり、堅く締まっている

3　暗褐色土　：ロームブロック若干、ローム粒子やや多く含む粘性あり、締まり良し

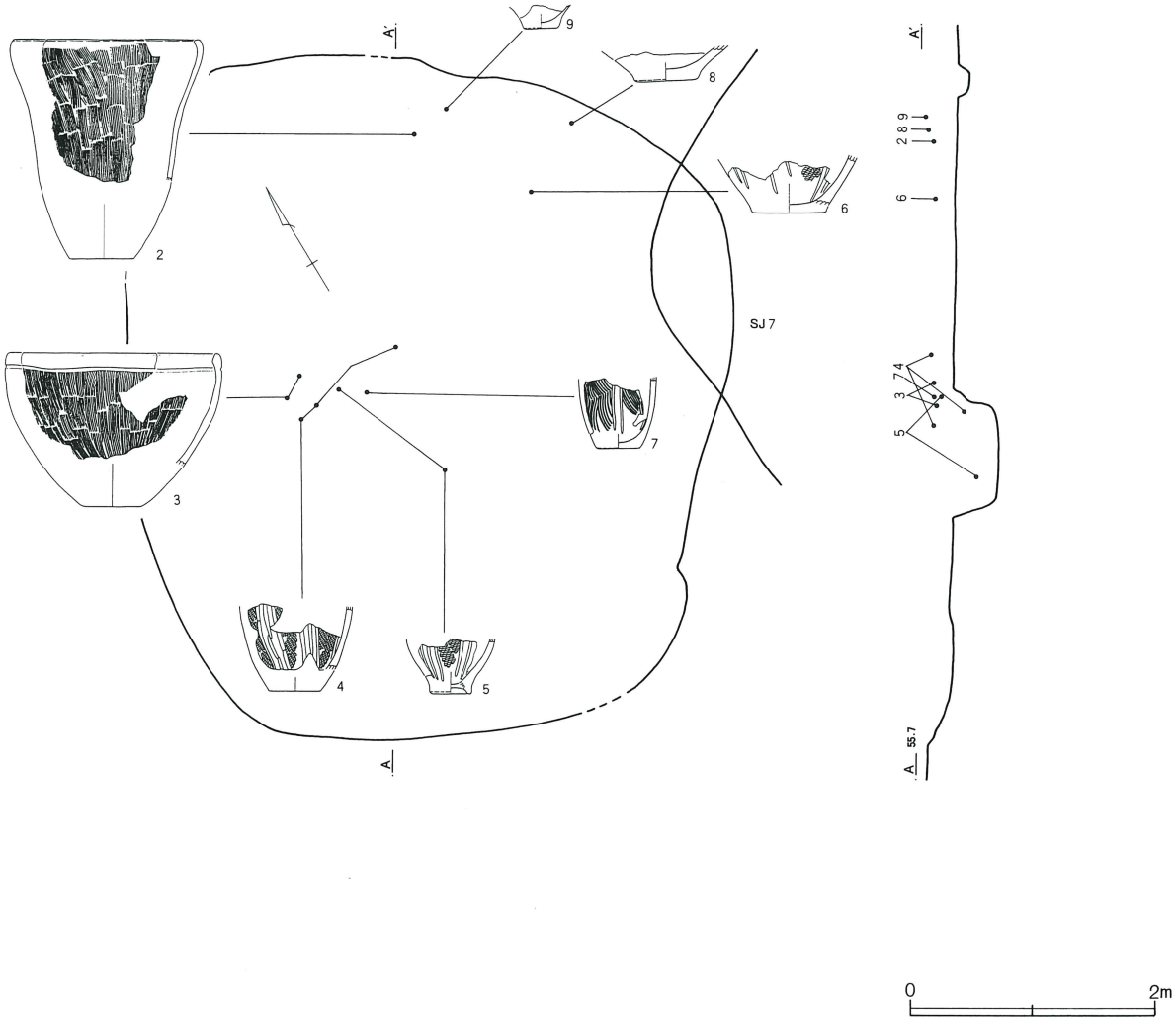
4　暗褐色土　：焼土ブロック・焼土粒子多く、ローム粒子少量含む　締まりなし

5　暗褐色土　：ロームブロック・焼土ブロック若干含む　粘性欠き、締まりなし

6　暗褐色土　：ロームブロック若干、ローム粒子少量含む　粘性欠き、締まりあり

7　黄褐色土　：被熱したロームブロック集積　粘性欠き、非常に堅く締まっている

第379図　D区第8号住居跡遺物分布図



なす。口縁直下に1条の沈線が巡る。胴部には櫛歯状工具による縦位の条線が施文される。口径推定28cm、現存高14.4cmを測る。

4は深鉢胴下半部である。三本沈線の磨消し懸垂文が垂下し、地文はＲＬ単節の縄文が斜位に施文される。復元最大径約15cm、現存高8.4cmを測る。

5は深鉢の胴下半部から底部である。底部直上にくびれを持ち、底面は上げ底状を呈する。二本沈線の磨消し懸垂文が垂下し、ＲＬ単節の縄文が縦位に施文される。底径5.5cmを測る。

6は深鉢底部である。磨消し懸垂文が垂下し、ＲＬ単節縦位回転の縄文が施文される。底径9.8cmを測る。

7は深鉢胴下半部から底部である。磨消し懸垂文が垂下し、地文は半裁竹管状工具による波状の集合沈線が施文される。底径5.4cmを測る。

8・9は無文の底部である。8は浅鉢、9は深鉢に属するものであろう。

10～15・17はキャリパー類の口縁部である。10は入り組み状の渦巻モチーフが描かれる。地文は口縁部にはＲＬ単節の縄文、頸部には櫛歯状工具による縦位の条線が施文される。11は水平口縁であるが、口縁部文様帯の隆帯渦巻の部分が小突起を形成する。12は口縁上に山形の突起を配してここに隆帯の円文を描き、この円文の下端からハの字に隆帯が垂下する。隆帯は口縁下を巡って、弧状の区画を構成するものと思われる。14は口縁下に沈線のみによる楕円区画が描かれる。胴部には幅広の磨消し懸垂文が描かれる。地文は櫛歯状工具のごく淡い条線が縦位に施文される。16・20～23